
砂漠の守護者

砂漠の蜻蛉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砂漠の守護者

【Nコード】

N6188J

【作者名】

砂漠の蜻蛉

【あらすじ】

カトラル王国に戻ってきたルークは一匹のラティアスを助け出す。そこから、国を巻き込む大事件に巻き込まれてしまう。

登場人物

登場人物

ルーク

色違いのフライゴン 用心棒をしながら旅をしている
故国カトラルに戻ってきた

ハンナ

ラティアス 王都へ行きがっている少女？国王に対して反抗
気味

ラーク・セレン

フライゴン カトラル王国国王 諸外国では『話術の天才』の異
名を持つ お茶好き

ハク・カータ

カイリユー カトラル七氏族のカータ氏族領主 カイの息子 無口

ケルト・ユーナ

アブソル カトラル七氏族のユーナ氏族領主 冷静沈着な氏族領主

ファラルス・シルイ

ドサイドン カトラル七氏族のシルイ氏族領主 お気楽者 ケト
ルとは昔からの知り合い

リトルナ・セナ

マニユーラ カトラル七氏族のセナ氏族領主 ただ一人のメスの
氏族領主

ユシール・リーン
トロピウス カトラル七氏族のリーン氏族領主 ラークと年が近
く気が合う

ゼブリス・ジャータ

ガブリアス カトラル七氏族のジャータ氏族領主

カイ

カイリユー ルークとともにカトラル王国から逃げ出した 当時
最強と言われていたカータ氏族領主

ティカ

ヌマクロー 隊商の主人の娘さん

エク

エアームド 商隊に用心棒を紹介する仕事をやっている。

用語集

隊商

各国を回りながらものを売っている商人の隊

バル

カトラルでよく食べられる パンのような物

ハクレイ湖

王都にある大きなオアシスの湖

序章 旅立ち

家には鍵が掛かっていない

「おかしいな、お兄ちゃんはこのことにはしないのに。」

そう不思議に思いながらもハンナは家に入った。

「なっ何これ……。」

家も中は嵐が通り過ぎたようになっていた。机がひっくり返り、花瓶の破片が床に散らばっている。

それを見てハンナは心配になってきた。

「お兄ちゃん、どこー。」

兄を捜しながら入った部屋をみて驚いた。

二人で守ってきた大切な宝石がなくなっていたのだ。

「うそ……そんな……お兄ちゃん。！！何これ。」

足元に何かある。拾ってみると小さな布だった。破けてボロボロだったがそこには確かに描かれていた。青い布に煌煌と輝く太陽と月の印。

「これって。」

ハンナは荷物をまとめると家から飛び出した。

1話 出会い

ここはカトラル王国、ユーナ領、ヒラバン

さすがにこの大陸の流通の拠点だけあってポケモンがおおい。

その通りにルークはいた。

上からの日差しが暑い

「ついに帰ってきたんだな。」

「キヤー！」

「なんだ、悲鳴？」

悲鳴の聞こえた方へ行くとラティアスが2体のアリアドスに襲われていた。

あのアリアドスには見覚えがあった。

人身売買組織の『蜘蛛の糸』の一味だ。

こんな仕事をしているといやでも耳に入ってくる。

もちろんどの国でも人身売買は認められていないが監視の目をくぐって活動しているやつらがいるのだ。

ラティアスは珍しいので、大切な『商品』ということだろうがこちらにはそんなこと関係ない助けなければ。

「（はあ、なんでこうなるんだか）おい！お前らここで何をしている！」

「あん、誰だお前。」

汚い声だ。

「私は『砂地獄』のメンバーだ。ここでの仕事は私が許さない。」

『砂地獄』はカトラルルにいる人身売買組織だ

「もう一度だけ言う。その子を置いてさっさと失せろ！」

「なんだとなめるな！」

ルークは襲いかかってきたアリアドスを軽く避け火炎放射で黒こげにしてやった。

そのあと慎重にラティアスに絡まっている糸を切った。

ラティアスが恐る恐る聞いてきた。

「・・・ねえ、あなたって本当に『砂地獄』のメンバーなの。」

「そんなわけない、さあ早く家に帰りなもう捕まるなよ。」

そういつとルークは立ち去って行った。

路地裏に行くルークのかんが何かをとらえた。

「（つけられてる、さっきのラティアスだな。）」

曲がっても曲がってもまだついてくる。

「（仕方ない）」

ルークは角を曲がりそこで立ち止まった。

「キャッ。」

「やっぱりお前が、なんでついてくるんだ早く帰れっていったただる。」

「ついてきてないもん。同じ道なだけ」

「ふーん、これでもか周りを見ってみる。」

そこはさっきアリアドスたちがいたところだった。
ルークは同じところを一周しただけだったのだ。

「これはっ その・・・。」

「ほら答えられないじゃないか。」

「こっこれは・・・ううわーん。」

「何で泣くんだよ、おい、泣き止んでくれー。」

しばらくすると野次馬が集まってきた。

「この人、女の子を泣かしてるわよ」「サイテー」「彼女を泣かしてるよ」

「うっ！うときは意味もなく騒ぎ立つものだ。」

「なっ！ちが……。おい早くこっちへ来い。」

「じゃあ好きなことつれつててくれる。」

「分かった、分かったから。」

「やったー。」

「泣いてなかったのか……。」

「当たり前でしょ、それより好きなどこ連れてつてくれるっていったよね。じゃあそこに連れてつて、話はそこから。」

ラティアスが指差したところは何やら甘い匂いがる店だった。

「ちょっと待て。」

「どこでも良いって言ったよね。あっちなみに名前はハンナっていうのよろしくね。」

「よろしくじゃなくて……。うわっ！引っ張るな！」

ハンナと名乗ったラティアスは無理やり店へ引きずり込んだ。

1話 出会い（後書き）

ルーク「なんだこのラティアスは初めから最後まで説明しろ。」
それ言っちゃつと話がわかっちゃうから

2話 砂漠へ（前書き）

ルーク「これから嫌になるな。」

かと言ってほっとけないでしょ

ルーク「それに昔の私に似ている。」

性格が？

ルーク「境遇が。」

2話 砂漠へ

「えーっと。あと、これとこれとこれ下さい。」

無理やりハンナと名乗るラティアスに引きずり込まれて機嫌が悪いルークを尻目に、ハンナはどんどん食べ物頼んでいく。

「かしこまりました。あの、そちらの方は……。」

ルークの嫌悪感を感じ取った空気の読める店員のポケモンは、恐る恐る「（と言つか怯えながら）注文を取る。」

「水で。」

「ハッ。水ですか？」

「そう、水。」

いくら砂漠の国カトラルでも、街には少なからずオアシスがあるはずだ。それも一般の国のように使っても十分くらい。

店員のポケモンが何事も無かったようにカウンターへ戻っていくのを見とどけて、ルークは目の前のラティアスに向き直った。

「いったい私に何の用だ。礼だったらいらないからな。」

「お礼じゃないわ。」

「じゃあ、何なんだ。」

ラティアスは「えーっと」とか「うーんと」とか言って何を言おうか考え、決めたように向き直った。

「道を教えてほしいの。」

「道？」

いくらなんでもそれはひどいだろ。無理やり連れ込んで道を教えてほしいだけだなんて。それともよっぽど重要なことなのか。いやそれなら、なおさら初対面の私になんか聞く訳がない。

そんな考えをめぐらさせていたルークを無視してラティアスは続けた。

「お城ってどこにあるの。」

「はあ。」

そんなこと市役所にもいけば簡単に分かることなのに。だがついつい教えてしまう。

「カトラル城なら、ここから東に十日、寝ずにいけば八日ぐらいのところにある。」

「東に十日ね。……って東に十日！なんで！ここ王都じゃないのー！」

ここまで来ると逆に可哀想に思えてくる。親切に教えてあげるところにした。

「ここは、ユーナ領のヒラバンだ。」

そうこうしているうちに、注文していた料理が出てきた。ラティアスは歓声を上げたが、その量に久しぶりに引いてしまった。

「そっそれ全部食べるつもりなのか。」

「当たり前でしょ。一週間何も食べてなかったんだから。」

「金は。」

「持ってない。」

さっき少しおさまった怒りが、またフツフツとよみがえってきた。ルークの今の、手持ちではゆづに一年は暮らしていけるが。それ以前の問題だ。

ルークは立ち上がるときっぱりと言い切った。

「私は、もう行くからな。代金は払っというてやるから。」

「ふえ、ふあってよ。」

口の中に食べ物を入れていて何を言ってるのかよく分からないが、あらかた「待つて」とでも言ったのだろう。

ラティアスは口の中のものをのみこむと耳を貸すよう仕草で示した。

「なんだ。」

耳を口元に近づけラティアスの話を聞く。

「ななな何故、その事を。」

するとラティアスは得意げに答えた。

「へへー。あたし相手が何考えてるかちよつと分かるんだよね。王都へ行くんでしょ。じゃあいつしよに連れてってよ。」

「ーっ。砂漠の移動経験はあるのか。」

椅子に置いてある荷物を左手で持ち、なるべくラティアスの方を見ずに言い。代金を払うとさっさと、出て行った。

しばらくして、二人は砂漠に足を踏み入れていた。灼熱の太陽が眩しい。

「ねえ。」

ラティアスがブチブチ文句を言ってくるが無視した。

「ねえ。ちょっと、聞いてる？」

それを無視すると、今度は耳元で――（しかも大声で）「聞こえてますかー。」と言ってきた。

「うるさい！そんな大声で話さなくても聞こえてる！私は耳が良いんだ！」

怒鳴ったせいで頭がジンジンする。

「大体あなたが無視するからでしょ。」

負けじとラティアスが突っかかってきた。

「大体ね……」

「あーもう分かったから早く要件を言え。」

ルークは諦めたように言った。

「水ってもう無いの？」

「はっ？」

「だから水ってもう無いの。」

まさかとは思ったが、そのまさかだった。せめて三日間もてば水が出てくる場所があるが、まさか一時間も歩かずに持ってきた水がすべて無くなってしまふなんて……。

「お前、砂漠での移動経験があるって言ったよな。」

「お前じゃなくて、ハ・ン・ナ。」

「文字ずつ開けるところを見るとよっぽど『お前』と呼ばれとくなくらいらしい。」

「じゃあハンナ、砂漠を旅したことがあるんだよな。」

「あるわよ。海の近くにあるやつ。」

それはつまり『砂浜』だろう『砂漠』ではない。同じなのは砂がたくさんあるだけというところだけで、まったく違う。落胆にしか聞こえないため息とともに、突っ込む気がどこかへいつってしまった。だがこんなところで呆れかえっているほど暇はない。

「戻るぞ。」

「どこへ？」

「ヒラバン。」

「またあ。」

「うるさい。元はと言えばだな……」

お前が水を全部のんだから。と言おうと思ったのをやめた。こんなところで言い争ってたら喉が渴くだけだ。

「ここで干物になりたくないなら、さっさと戻るぞ。」

さすがに今は効いたらしい。ハンナがちょっと素直になった。

「さて、戻ってどうするかな。」

何としてもカトリシアに着かないとどこまでもついてきそうだし、かと言って砂漠も渡れない。

「そうだ！」

一つだけあった、ハンナでも砂漠を渡れる方法が。

2話 砂漠へ（後書き）

良いことってなんですか

ルーク「それは次の話だ。私の本職だからな。」

ほほー。用心棒ですね

3話 隊商(前書き)

途中にでてくる【】は、外国語でハンナは分かりません。

3話 隊商

ヒラバンに戻った時には、すでに辺りは赤く染まり始めていた。仕方ないので、今日はとりあえず宿を探すことにした。

さすがは、大陸南西部の物流の拠点と言うこともあり、宿はすぐに見つかった。

部屋に入るなりルークはため息をついた。

「はあ。まさか一日も持たないとは。予想外だった。」

「それは、嫌み？」

「以外なんだ。」

その言葉にちょっと怒ったらしい。ハンナは少し顔が赤くなった。

「何よ。しょうが無いじゃない！まさかこんなに大変だなんて思っ
てなかったんだから！」

「それが甘いと言ってるんだ。」

正論だがハンナは認めたくないらしい。

「そこまで言わなくてもいいじゃない！女の子には優しくしろって
教わらなかったの！」

「知っているけど、時と場合によって使い分ける方がやりやすい。」

こうは言ったものの、ルーク自身、使い分けられているのか疑問

が多い。

「もうとりあえず寝る。」

毛布をかぶり無理やり話を終わらせようとしたが、ハンナの悪口は、夜中まで続いた。

翌朝、二人は街中にいた。

「うーっ。眠い。」

ハンナが目を擦りながら言う。

「夜中じゅう、喋ってるからだろ。」

「なんで眠くないの。」

「私はちゃんと寝たからな。着いたぞここだ。」

ルークは冷たく返し、どう見てもただの家にしか見えない建物を指差した。

「ねえ。これが昨日言っていたいい方法？」

「もちろん。」

取っ手に手をかけて横へ動かすと、まだ昼の熱気を感じさせない空気が滑り出してきた。

「珍しいお客さんだな。」

声とともに奥から左の目元に傷のあるエアームドが姿を現した。

「もう来ないかと思ってたぞ。ルーク。」

「気が変わったんだよ。」

「ふーん。で、その後ろにいる子は。」

エアームドはルークと壁の隙間から後ろを覗き込んだ。

「まあいいさ。そこは暑いだろ。入れよ。そこのお譲ちゃんも。」

エアームドはハンナを呼び入れるとしっかりと扉を閉めて外の空気が入らないようにした。

入るなりエアームドは突然、ルークをカウンターに引き込んだ。

「ルーク、オレは知らなかったぞ。お前にそんな趣味があったなんて。」

「はあ？」

「あの子だよ。」

「ああ。」

連れてくるなり何を話すかと思えば。

「何だ。違うのか。」

つまらなそうにエアームドが切り出す。

「当たり前だろ。」

「まあ、そんな目してたら女なんて寄り付かないだろうがな。」

ルークの目は、フライゴンの特徴でもあるカバーの上からでも分かるくらい、冷たい光を放っている。そのせいか大抵のポケモン達には、冷たい印象を与えてしまう。

「この目は生まれつきだ。今更、何もできない。それよりもういいだろ。」

ルークはカウンターを飛び越えてハンナを呼んだ。

「……誰？」

初対面で失礼すぎるだろ。と思ったがエアームドは大して気にしてないらしい。

「オレ？オレはエク。よろしくな。」

エクは顔からはあまり想像できないくらい気さくに答えると、話を本題に戻した。

「で、今日はまたなんで。」

「カトリシアへの護衛の口は無いかと思ってな。」

エクはカウンターの上にあつた台帳をしばらくめくっていたが、しばらくして顔をあげた。

「残念ながら無かった。建国祭があるから、もう出払っちゃった。」

「そうか。」

「しかし、これまたなんでカトリシアになんて行くことと思ったんだ？」

「ああ、それは……。」

扉の外に何かの気配を感じ、話を中断した。

「あ……あの〜」

入ってきたのはラグラージだった。どうやら商人らしい。

「いらっしやい。」

「ここ 来れば 用心棒 紹介してくれる 聞いたので。」

「どうやら、東方から来たらしい。なまりがあり聞き取りにくい。だがそこはエクだ。反応が早い。」

「【用心棒ですか。それなら、そこにいますよ。】」

エクは東方で使われる言葉を、一度もつまることなく話していく。

「【この方は、大丈夫でしょうか。なんだか機嫌が悪そうな。】」

「【大丈夫ですよ。彼の目はいつもこうなんですから。それに彼の腕は一流ですよ。一日、5銀出してもいいくらい。】」

「ねえ。なんて言ってるの。」

ただ一人、東方の言葉を知らないハンナは、すでに話に乗遅れているようだ。

「用心棒を捜しているらしい。」

ルークはラグラージに会釈をして、交渉に入った。

「【私は、ルークと言います。】」

「【初めまして。こっちはタハと言います。さっそくですけど、これからカトリシアに行くこうと思っっているんですけど。】」

「【それはよかった。私達もカトリシアに行くこうと思っていましたから。】」

「【さっきは失礼なことを。】」

「【気にしていませんから。】」

「【それで、さっそくなんですけど……。】」

「【私は、普段、三食と一日、銀貨三十枚ですが、連れがいるので二人分の食事と銀貨十枚でいいです。】」

タハの目が大きくなった。まあ、当り前の反応だろう。一日銀貨十枚と三十枚とは全然違う。ちなみに用心棒の相場は、大体一日、一レドくらいだ。

「【そんなに安くしていただけるのなら、喜んで!】」

「ねえ、なんて言ったの?」

やはり、話がまったく分からないハンナは、今度はエクを訪ねた。

「交渉終了ってとこかな。」

「?????」

「ハンナ。」

「何、どうなったの？」

ハンナは、話を終えたルークに詰めよる。

「明日の朝、七の刻で街の門だ。」

それだけ言うと、ルークはエクに紹介料を払った。

「毎度。それにしても、なんで今まで来なかったんだよ。店を変えたってお前に言っただろ。」

「この国には昔、色々あったからさ。」

「ふーん。ま、いいけどな。」

なぜ、自分がエクを気に入ってるのか、今分かった。彼は、他人の事を深追いしない。そう言えばシグラもそうだった。ルークとハンナは、エクにもう一度礼を言うと店を出た。

翌朝、二人はヒラバンの砂漠側の門にいた。

「うっ、寒い。」

砂漠は昼と夜とで気温が全然違う。雪山ほど気温は下がらないが、昼が暑すぎて寒く感じてしまう。

「なら、これを着ろ。」

「何これ。」

「ローブだ。昼は日よけになる。」

そう言うルークはすでにローブを羽織っている。あまりに寒いので、ハンナも羽織ることにした。

ローブの端を前で押さえながら、しばらく待っていると何かが走ってくるのが見えた。それはどんどん近づいてくるとだんだん又マクローの形になり、ハンナに飛び付いた。

「わあ。あなたがハンナね。お父さんが言ってた通り。ああ、アタシはティカ。よろしくね！」

よろしくね！なんて言われても、誰だか分からない人に何を言ったら良いのだろうか。

「あ、えーっと。よろしく……。」

「【おい、ティカ。何をやってる。】」

その声と共に、大きい荷台一（というか屋根つきの馬車）を引っ張るラグラージの姿が見えた。

「【おはようございます。ルークさん。妻と、息子達です。その子

は、一人娘のティカです。」

なるほど、確かにタハを除いたラグラージが三人とミスゴロウが一人。どうやら家族で隊商を組んでいるようだ。

「【ここからカトロシアまで、よろしくお願いします。】」

「【任せて下さい。】」

ルークは目をあげタハ一家に挨拶をした。

3話 隊商（後書き）

ルーク「私はずっとハイテンションでいる者といるとかなり疲れるのだが。」

その気持ち分かりますよ。

ルーク「なら、なぜ入れた。」

いやそれは・・・色々と面白いかなと思ったので。

4話 カトラル七氏族（前書き）

カトラル七氏族登場！結構頑張りました。

4話 カトラル七氏族

カトラル王国のほぼ中央、ハクレイ湖の畔にある大都市、王都カトリシア。この街は砂漠の中にある広大なオアシス、ハクレイ湖を中心として栄えた街だ。

カトラル城にある会議室では半年に一度ある重要会議が終わり、領主たちの交流の場となっていた。

「あー！また負けたく。」

そう嘆くのは、シルイ領主、ファラルス・シルイだ。赤の地に金の糸でシルイ領の紋が縫われた布を首に巻いている。

「不用意な賭けをするからだろう。」

その横、慰めているのかどうか分からない言葉をかけているのは、ユーナ領主、ケルト・ユーナだ。黒の地の布に同じく金の刺繍が施されている布を巻いている。

「本当、バカよね。それさっきと同じ手だし。ねえ、ユシール。」

そうファラスを責めるのは、白の地に金の刺繍が施されている、セナ領主、リトルナ・セナだ。

話を振られたリン領主、ユシール・リンは、首に巻いた明るい緑色の布を触りながらどうしようかと思悩んでいる。

「過ぎたことを言ってもしょうがないでしょ。これは貰うよ。」

そう言ってテーブルの上にある賭け石を集めるのは、金の地に国

章が描かれている布と、橙の地に金の刺繍を施している布を首に巻いている。カトラル国王、兼セレン領主、ラーク・セレンだ。

「大体、この賭けをしようって言い出したのはファラルスだろ。」

今やっているゲームは、俗に言うポーカーのようなものだ。もちろん、賭けているのはただの石だが、負けたら資料整理をすることになっている。

「さあ、これで最後のゲームだ。」

そう宣言して、それぞれ五枚ずつカードを引き、場代替わりの石を五つテーブルに置く。

「最後は国王からですよ。」

カードを見ながら黄色の地に赤褐色の色をした刺繍をした布を首に巻いている、カータ領主、ハク・カータが言う。

「俺は、降りますけど。」

そう言うのは、紫の地に金の刺繍をした布を首に巻いている、ジャータ領主、ゼブリン・ジャータだ。

「じゃあ、十個。」

ラークが自分の前に石を十個出す。

「次、ハク。」

「降ります。」

そう言ってハクは自分の持っているカードを見せる。ノーペア、つまり最弱の手だ。

「俺も。」

ゼプリンもカードを見せる。ハクと同じだ。

「じゃあ、アタシも。」

「私も降ります。」

リトルナとユシールも降りた。

「不用意な賭けはしませんよ。」

ケルトもカードを見せる。皆、あってもワンペア、あとはノーペアだけだ。

残りは……。

「俺は行くぞ！持ち石全部だ！」

そう言うのは、他でもないファラルスだ。たぶん他の領主は全員、こいつはバカだ。と思っただろう。ケトルが止めに入った。

「おい！本気が、確かにこのままいけばお前は負けて資料整理だろうが、だからと言って全部賭けることは無いだろう。領主として恥ずかしくないのか。」

そう、賭けていたのは大量の資料整理。それだけだ。

「コール。」

ラークがケルトを無視して進め石を二十枚上乘せする。

「国王。」

「自信があるんなら良いんじゃないの。」

「ヨッシャー！いくぞ！スリーカード！」

ファラルスが自分のカードを机に叩きつけた。

結構良い組み合わせだ。

ラークは自分の手札とテーブルにあるカードを見比べて、息を吐くとカードをテーブルに置いた。

「フォーカード。場にある石は私の物。」

「ダー！！」

「哀れな。」

「資料整理頑張っただけ。」

ゲームが終わってそれぞれ自室に戻って行った。

残っているのはラークとユシール、ケルトとファラルスだ。

「さて、ちょっと出てるかな。」

「ラーク様、どちらへ？」

「たちあがったラークにユシールが聞く。」

「街を散歩して、図書館に行つて、いつもの所へ。」

「わたくしもお供します。」

「そう。ケルトはどうする？」

ケルトは、座っていた椅子から飛び降りラークに向いた。

「ちょっと、ヤボ用がありますので。」

「そう。じゃあ、ファラルス、資料整理よろしく。」

三人が出ていくと扉が閉じられ、中から悔しさの混じった声が聞こえた。

ラーク達が戻ってきたのは、ハクレイ湖に夕日が当たりキラキラと輝いている頃だった。

ユシールは自室に戻って行ったので、ラークも自分の執務室でガレン王国から来た手紙を見ていた。

「ファラルス、どうした。」

扉に呼びかけると開いた戸からファラルスが姿を現した。見計らったように手紙を投げると、ファラルスは見事に手の中に手紙を落とした。

「ガレンが勝って良かった。シユロが勝っていたら何か手を打たなければならなかったから。」

ファラルスが手紙を開く。

「これをあの数秒で読んだんですか？」

手紙には戦後報告やら、友好条約の内容やらがぎっしりと書かれている。

「もちろん、すべて頭に入っている。で、何の用？」

「はい、実はケルトの様子がこのごろおかしいんです。」

「例えば？」

「例えば、なんかボーっとしてるし、動いたと思ったら何かを捜してるようだし、それに。」

「それに？」

「俺のポケに突っ込んでくれないんです！」

「は？何それ。」

「ですから、その通りですよ。」

「考えすぎだろ。それかそのポケがあまりにつまらなかったか。大丈夫、我々は七氏族。その結束は乱れることは無いだろうし。」

「そうですね。お邪魔をして申し訳ありませんでした。」

一礼するとファラルスは部屋から出て行った。残ったラークは腕を組み考えを巡らせた。

「ケルト……か。」

「完成させました。だ……だから妻と子を返して下さい……！」

ポリゴンが、足元にすがり寄ってきた。

「ああ、今すぐ会わせてやる。」

「本当ですか!」

ポリゴンは、鋭い爪が降りあげられていることに気付かなかった。

「もちろん。」

その夜、短い悲鳴が上がったが気付いた者はいなかった。

5話 夜の砂漠

ヒラバンを出発して四日、そろそろ中間地点の町シヤナが見えてくる頃だ。

ハンナは、この四日間で随分と隊商の仕事に慣れてきた。それに、用心棒の仕事も分かってきた。各町の自警団は、町を守れても砂漠までは管理できない、そこに出没する盗賊から隊商を守るのが用心棒ということだ。

だが、まだルークかティカがいないとまともに話が出来ない。

「ハンナちゃん！危ない！」

「えっ!？」

顔を上げたハンナの上に荷物が落ちてきそうになった。いつもならサイコキネシスで受け止めているが、ボーっとしていた為、反応が遅れてしまった。

ぶつかると思った時、右腕を掴まれて後ろに引っ張られた。その目の前を重い荷物が落ちていく。

「あ、ありがとう。」

「ボーっとしてるな。」

ハンナはルークの腕の中に収まっていた。顔が赤くなったのが自分でも分かった。

「……?」

「ちょっと離してよ！」

抱えているルークの腕を無理やり引き離して、元の体制に戻る。

「ハンナちゃん。大丈夫ー。」

心配したティカが馬車（？）の上から飛び降りてきた。

「。。。。。」

「ハンナちゃん？顔、赤いけど。」

「何でもない！何でもないからっ！」

そう言ってハンナは反対側に逃げて行ってしまった。

「全く。」

ルークは落ちた荷物を上へ乗せると持ち場に戻った。それを見ていたティカは

「フーン。そうゆうこと。」

と、一人で勝手に頷いた。

空にはガラスの欠片を散りばめたような星が輝いている。その光の外は闇。ただ何も無い砂の大地が横たわっていて一度足を踏み入れたら二度と戻ってこれないだろう。そこに明かりを灯すのは月の光と隊商たちの炎だけだ。

「【しかし凄いですね。あの数の盗賊をものの一瞬で。】」

「【運が良かっただけです。それに明日にはシヤナに着くはずです。そうすれば盗賊は出ないでしょう。】」

タハとルークが喋っていることは、今日出た盗賊のことだ。数が多かったがルークの砂嵐で砂の中に埋めてきた。今頃、掘り起こした仲間の手当てをしているだろう。

そんな事を思いながらハンナは温かいスープを口に入れる。夜の砂漠は寒すぎる。

「ハンナちゃん。ちょっと。」

「何？」

ティカに呼ばれ、皆とは反対側に周った。

「ハンナちゃん。」

「どじしたの？」

「ルークさんのこと、好きでしょ。」

「ブツ！ なななっ何言ってるの！」

さっき口に入れたスープを吹き出してしまった。

「凶星だった。まあ、かつこいいしねルークさん。」

「何だよ。だってまだあたし十七だし。」

「だからじゃない。あたしなんてこんな風だから好きな人なんてで
きないし、用心棒の人でかつこいい人を見つけて楽しんでるだけだ
し。」

「フーン。で、」

「ルークさん、かつこいいからどうかなって思ったんだけど。諦め
ちゃった。」

「何で？」

ティカが足をぶらぶらさせる。

「だって、ハンナちゃんがいたから。」

「なんでそうなるのよ。大体ルークの事、全然知らないし。歳とか」

「うーん、あたしの予想だと二十代。」

「ほんとに。その予想当たったことあるの？」

「無い。」

ティカが自信たっぷりに言うので笑ってしまった。

「何で。自信ないならそんなこと言わないでよ。フアーア眠くなっちゃたから。」

半ば強引に話を終わらせたハンナは、ティカと一緒に皆がいるところに戻った。

その後、毛布の中にハンナはなかなか寝られなかった。

「うーん、もうっ！ティカが変なこと言うから、気になって眠れないじゃん！」

少し前に起こった出来事を思い出してまた、顔を赤くした。

「何考えてるの！あたしはっ！あーっもうっ、外の空気吸ってこよ。」

首を振って毛布を片手に外へ出た。冷たく乾いた空気が顔に当たる。上を見るとルークが空を見上げていた。

「ハンナ、何の用だ。」

てっきり気付いていないと思っていたハンナはびくっとして体を震わせた。

「別に、なんでも。」

興味がなさそうに、ふーんと言ったあとに、ハンナの方を見ずに言った。

「そこは寒いだろ。こっちに来ればいい。」

「・・・分かった。」

ハンナはルークの近くに登ると体を近づけた。寒さにはかなわな

い。
「どっつした？」

「眠れなくて。ねえ、あたしあなたの事が知りたい。」

「・・・例えば。」

「例えば、なんでこんな事をやってるかとか。」

しばらくの沈黙。

「良いが面白くは無いらな。」

「うん。それでも良い。」

一つ間を開けるとルークはつぶやくように話し始めた。

5話 夜の砂漠（後書き）

だんだんシリアスになってきたな。

ルーク「こつこつという話を入れるのが好きなのか？」

さあ。

6話 旅の訳（前書き）

ルークの過去はどこかで出てきます。

ハンナ「何それ。この話意味無いじゃん。」

まあまあ。それより、本当にルークに気があるわけ？
ハンナ「うっ！」

6話 旅の訳

町の明かりが無い、薄く氷を張ったような静寂に包まれた満月の夜は、ルークにとって最も落ち着く時間だ。

「……………ハンナか。」

下を覗くと、ハンナがいるのが見えた。寒そうなのでこっちに来るように言った。素直に従ったハンナは後に着くと唐突に私の事が知りたいと言ってきた。それは、触ると痛む生傷のような物。自分でもなぜ話そうと思ったのか分からない。

「きれい。」

ハンナが月を見上げて言った。

確かに町の眩しい光が無い月は白く柔らかい光を放っている。

「何が聞きたい。」

「何が？」

「聞きたい事があつたんだろ。」

「じゃあ、さっきなんで気付いたの？」

「空気が乱れたから。」

冬の湖のような水面に波を立てるのと同じだ。夜の集中力は、昼の二倍はあるだろう。

「ふーん。じゃあ、ここからが本当に聞きたい事。あたし何を考えているか分かるって言ったよね。実はその人の昔の事も分かったやうんだ。でも、貴方は全然見えない、真っ暗。」

「……………」

「貴方はこの国で生まれた。そうでしょ。」

沈黙。それが答えだ。

「この国は、重税で苦しんでいたり、食べるものが無いような国でも無い。だったら……………」

「私は。」

最後の言葉が重なり、また会話が途切れた。

「私は、ただ……………」

「ただ？」

言葉が見つからない。いや、見つけることを自分自身が拒否している。

「大丈夫？無理しなくても。」

「…………分かった。」

「？」

「私に気があるだろ。」

「な、な、な、な。」

やっぱり。普段は全くなのにこの時間帯だけは、なぜか他人の気持ちが分かる。誰に似たんだか。

「私は、ルーク。そして用心棒。それだけだ。」

「じゃあ歳は？」

「二十五。もう良いだろ、次は私の番だ。」

話を強引に終わらされて腑に落ちない顔をしていたハンナが、顔をあげた。

「何故、カトリシアに行きたい。」

ルークの歳が二十五と聞いて、ハンナはティカに脱帽した。両方の言葉がすらすら言えるだけでも凄いのに、ルークの大体の年齢まで当ててしまうとは。

彼の昔話は聞き出せなかった事は残念だが、そのうち分かるだろう。面白くて下を向いて笑っていたが、次の一言で顔をあげた。

「何故、カトリシアに行きたい。」

それは今まで切り出せなかった事、もう隠している事は無いので言おう。言おう。と思っていたがいつの間にかこんなに遅くになってしまった。

「これ。」

今までずっと持っていたものをルークに差し出した。実は、昼もこれを見ていてボーっとしていた。

差し出したのは布切れだ。青の地に太陽と月が描かれているが、きれいに破れている。

「・・・これは。」

「家に落ちてたの。家が荒らされていて、お兄ちゃんがいなくなつた。代わりにこれが落ちてて。」

これは紛れもなくカトラル王国の国章。これが落ちていたという事は、どこかでこの国が関わっている事だ。

「あり得ない。」

ルークの呟きをハンナは聞き逃さなかった。

「どうして。」

「だが……。」

「なんなのよ！」

じれったい。無知のままにされるのは一番嫌いだ。

「この国にこんな事をする意味が無い。それに、現国王、ラーク・セレンはこんな事はしない。はずだ。」

「そうよ。だから国王に会いたいの。」

カトラル王国国王ラーク・セレン。彼なら知っている。その思いだけでここまで来たのだ。

「お兄ちゃんを助けたいの。お願い力を貸して。」

「一度乗った船を、降りようとは思わない。」

「じゃあ。」

「力になるう。」

ハンナは、ここへ来て初めてルークの笑った顔を見た。それは、闇を照らす月のようだった。

7話 ハンナと占い（前書き）

ハンナ「シャナではお祭りをやってるんだって。」

お祭りはあんまり好きじゃないな。

ハンナ「何で楽しいじゃない。お祭り お祭り」

ルーク「うるさい！少しは静かにしろ！」

7話 ハンナと占い

ついに中間地点シャナに入った。町と言ってもそんなに大きくは無
い村と言った方がしっくりくるくらいの小ささだ。

シャナが見えた時のハンナとティカの第一声は「これでやっとシ
ヤワーが浴びれる。」だった。しかも同時に。全く、考えているこ
とだけは同じだ。

シャナに入った時には辺りは暗くなっていた。ここには今日も入
れて、三日間居る予定だ。

シャナは普段は静かな宿の町で、近くにある畑を耕して生活を立
てている。だが今日は打って変わってお祭りムードだ。

「何かあるの？」

「収穫祭だろう。夏になると恵みを与える太陽に感謝するために祭
りを開く。」

丁寧に教えたがハンナには、祭の一言しか聞こえてなかったら
しい。

「行く行く。絶対行く。えーっと何祭りだっけ。」

「収穫祭。分かったから、離れる。ほら、半銅あれば足りるだろ。」

ルークは財布の中から長方形の赤っぽい板を渡した。これが半銅。
これだけあれば屋台の物は大体買えるだろう。ちなみにこれよりも
っと単位の小さいレイと言う物がある。それが25枚で半銅と
同じ価値がある。

「じゃあ。行ってくるねー。」

ハナは貰った半銅貨を持って外へ飛び出した。

「何が楽しいんだか。」

祭は嫌いだ。ただワイワイと遊んでいるのなら、一人でいた方がずっと気が休まる。

ルークは生まれてから一度も祭りに参加したことが無い。昔から誰かと遊ぶなど事はしたことが無い。シグラとあと一人以外は。

「ハー。静かな所でも探しに行くかな。」

ため息をつくと宿の部屋から出ていった。

「わー……。」

すごい。そうとしか言いようがない。

大通りの両脇にたくさんのお店が立ち並び、カトラル特融の茶色い土壁の町がきれいに彩られている。ポケモン達の楽しげな声に、空気もきらきらと光っているように見える。

収穫を祝う儀式はもう終わってしまったのが残念だったが、十分に楽しめそうだ。

「どこへ行くのかな。」

町の真ん中にある広場からは、四つの大通りが延びているが、どこも楽しそうに迷ってしまう。

取りあえず、目の前の道からしらみつぶしに見ていこうという考えにまとまった。

「よしっ。」

寄りかかっていた建物の壁から体を起こし目の前の道に足に向けた。

「（ちょっと色々より過ぎちゃったかな？）」

ついた次の日の朝から町に出たはずなのに、いつの間にか辺りはオレンジ色になっている。建物が赤く染まりきれいなのはいいが寒くなるのは困る。

「（でもこの２レイが中途半端なのよね。）」

ハンナの手には木製の円い硬貨が二つ乗っている。２レイでは食べ物も買えないし、かといって、全部使い切りたい。というハンナの気持ちを变えるつもりはない。

「どっしりよじ。」

悩みながら歩いていると濃い紫色の布がかかった場所についた。無意識のうちに一番目のつく物のところに来ていたらしい。

「ウラナイ。」

何となく入ってみると、うつすらと暗い中に椅子とテーブルがあった。その上には、これまた紫色の水晶玉がある。

「（変なところに来ちゃったかな。）」

そう思って出ようとしたが、後ろに何かの気配を感じて立ち止まる。

振り返るといつの間にかこれまた紫色の薄い布を顔の掛けたブーピッグの姿があった。

「いらつしゃい。運命に迷った子猫ちゃん。」

「あたし？」

ブーピッグがうなづく。

「恋の悩みだね。」

「えっ。べ、別にそんなんじゃない。」

ブーピッグはハンナを無視して続ける。

「分かった。ここを出てすぐに会ったポケモン、が好きな人ね。」

ブーピッグは水晶に両手をかざして顔を近づける。

「大丈夫。きっと上手くいく。」

「何が？」

「つつい聞いてしまう。やっぱり占いは気になる。しかも半分当たってるし。」

「さあ。それは分からない。」

「何それ。」

「水晶にだって見えないものはあるの。えーっと恋のお悩みだから2レイね。」

「お金取るの〜。」

「当たり前でしょ。はい2レイ。」

何となく納得がいかないが占ってもらったんだから仕方がない。
ハンナは持っていた2レイを置くと、店を出た。

「ハンナ。何をやってる。」

そこにはルークがいた。

「当たった。」

「何がだ？」

「何でもない。」

口走った言葉を首をぶんぶん振って否定する。

「あー！いた。」

「ティカ？」

見ると広場の方からティカが走ってくるのが見えた。

「ねえねえ。知ってる？今日、三種混合武芸大会がやるんだって。」

「サンシユコンゴウブゲイタイカイ？」

聞きなれない言葉に首をかしげる。

「とにかく凄いだよ！見に行こ。」

「本当！」

楽しいとか凄いという言葉にはすぐに反応する。良いのか悪いのかよく分からない。

「行く！ルーク早く。」

ハンナがルークの腕を引っ張る。

「腕を引っ張るな！」

嫌そうな顔をしているルークを無理やり引き立て三人は広場へ向かった。

7話 ハンナと占い（後書き）

ルーク「ポケモンがたくさんいるところは苦手だ。」

人がたくさんいるところは苦手です。

ハンナ「この二人って、似てる。」

8話 三種混合武芸大会（前書き）

ずっとルークの視点です。

ルーク「何故それを言う。」

ちよっと分かりにくいかなと思ったので。

8話 三種混合武芸大会

三種武芸大会。それはこの町の物好きが始めた体術、剣術、そして槍術やぶしゅを競う大会だ。全部混ぜて行うため色々な使い手とやりあえる。また、技の使用は禁止されているので普通のバトルでは勝てない様な相手でも倒せる可能性がある。

まったく、ポケモンには技というものがあるのだから、一々こんな物やら無くても良い気がするが……。

だが、楽しい物好きの二人はとにかく楽しければいいのだ。そんな理屈は通用しない。

「結構たくさんいるんだね。これじゃあ全然見えない。」

どうやらこの理屈が通用しないのはこの二人だけでは無いようだ。土を積んで高くした競技場の周りには既にたくさんポケモンがいる。

「ルークさんって何かできるの？」

ティカが興味しんしんに聞いてきた。別に隠すような事でも無いので素直に答えた。

「一応、槍術を少し……。出る気は無いからな。」

しかしもう遅かった。おそらく槍術の単語を聞いた時点でいなくなっていただろう。

しばらくして二人が戻ってきた。

「ねえねえ、この大会の優勝賞品、バルと乾酪チーズ一年分だって！」

ティカが興奮したように言う。そこまでして欲しい物が。

「乾酪……。よし！ルーク頑張つて優勝して。」

ハンナの興奮するときは決まって食べ物絡んでくる。

「今更出ないなんて言えないだろ。」

ハンナの事はどうだっていいが、運営している責任者に迷惑がかかる。それに、槍をもつのは嫌いではない。

ルークは仕方なくこの大会に出る羽目になった。

槍は木製で穂先は怪我が無いように木で作ったものに布を巻きつけてある。ルークは槍を右の手の掌と手の甲を、一周するように回した。槍はきれいに回転し元の位置に戻る。

ルークは槍を初めて見た時からその魅力に引き込まれた。美しく回転する穂先の残像。素早く標的を捕える突き。それは自分の手足の様に自由自在に動く最高の武器だ。

カトラル王国でも槍を使った作戦がいくつもある。

「この位かな。」

槍の先を上に向けて回転を止める。どうやら槍を使えるのはルークただ一人の様だ。地元出身のポケモンはみんな力自慢だし、外国では槍をやる者はいないらしい。

こんなに使いやすい物は無いのに。

「槍使いか。初めてだな。」

後ろからの声に振り向くと、そこには大柄なカイリキーがいた。どの腕も、鋼のような筋肉がついている。

「私に何か。」

「何も。ただそんなんで勝てると思ってるのが珍しくてよ。」

「ちょっとあんたさっきから何言ってるの!」

「ハンナか。」

上からハンナが飛んできた。まったく、どこから聞きつけてくるのか。その勘をもっと別の所で使えないものか。

「ルークは強いんだから!馬鹿にしないでよね。優勝して乾酪貰うんだから。」

たまにはいい事を言つと思つたが、やっぱり食べ物絡みか。

「へっ！そんな細い腕で俺様に勝てると思つてるのか。それにカトラル七氏族の奴らも細うちいのばっかだしよ。俺様がやった方が良いに決まつてる。」

「おい。今の言葉、撤回しろ。」

自分の事を言われるのはどうでもいい。確かにルークは平均的なフライゴンよりも少し細い。だが今の言葉は無性に腹が立つ。

「カトラル七氏族は守る力だ。素早く敵を囲み敵を制圧する。それがこの国の戦い方だ。お前のような奴は私にも勝てない。」

「なんだと！」

カイリキーは明らかに怒っているがやってはいけない事はちゃんと理解できるようだ。

「決勝で待つてやるからな！」

そう言い捨ててどこかへ行つてしまった。

「意外。」

ハンナが顔を覗き込んできた。

「ルークがこんなに怒るの初めて見た。意外と怖い。」

「私はお前とあつて今まで怒つた事は無い。」

「あれって怒って無いの！」

「正論を言ったただけだ。大体、七氏族の戦いも見た事の無い奴にそんな事を言われたくない。」

「じゃあルークは見た事があるの？」

「・・・自分で考える。」

「何それ。ちょっと待ってよ。」

五月蠅いハンナを無視してルークは会場へ上がった。

8話 三種混合武芸大会（後書き）

槍ができるって。どこでそんな物を・・・。
ルーク「自分で書いてるんだから分かるだろ。」

ああ。それもそうか。

9話 対決（前書き）

なんかノリで書いた話なので変な所がいっぱいあります。
ルーク「何でそういう意味の無いことを。」

9話 対決

開会式のようなものが終わり、ルークが台に上がってきた。相手は、リングマだ。

さっきやった解説によると、相手を台から落とすか、負けを宣言させると勝ちらしい。でも、力押しで落とす事が多いので技の切れなどは大して関係無いらしい。

「それじゃあ、武芸なんて入れなくてもいいじゃないの。」

それがハンナの感想だ。全くその通りだ。

「まあいいや。ルークがあのカイリキーを倒して、乾酪チーズが貰えればそれでいいし。」

「おい、聞こえてるぞ。」

「えっ！何でそんなに耳が良いわけ？嫌われるわよ。」

「それは、ハンナちゃんの独り言が大きいからじゃないの。」

その通り。一番前であれだけ大きな声を出していれば聞くなど言う方が無理だ。

「まあ気楽にやるかな。」

普通、槍の穂先は下に向けるものだがそんな事しなくても良いだろう。開始の合図とともに飛びかかってきたリングマは隙だらけだ。右から来たパンチを頭を下げて避けると、そのまま回転させた槍

を脛にぶつける。そして、体勢を崩したところを見計らい台から突き落とす。

その後の素人も相手にならない。外国から来たポケモンはさすがに簡単にはいかなかったが、それでも今まで切り抜けてきた経験からいってルークの敵では無かった。

そんなこんなでいつの間にか決勝に上がっていた。

ルークの戦いを見ていたハンナはその美しさに見とれていた。たぶんティカも他のポケモンも。

水が流れるような回転技、電光石火の突き。これがカトラルの軍人だったら誰でもできるといっても驚きだが、それを見た後でも十分きれいだと感じると思う。これで、満点をつけない審判がいたらその審判はかなり非難されるな。

「また惚れちゃった？」

横にいたティカがからかうように言った。

「な、何言ってるの。あつ。ほら来たから行く。」

ちょうど良くルークが降りて来てくれたので、その話は無理やり終わらせた。

「あー逃げるな。」

「ルーク。凄い！全然少しだけじゃ無いじゃん。」

「・・・凄くない。あんなもの、ただの道楽でしかない。」

「道楽つて。まだ本気出してないの!」

「当たり前だ。構えから適当に流してるだけだ。」

ルークが槍を振りまわすと空気が震えた。

「構えから適当と言う事は・・・。」

考えて一つの答えにたどりついた。

「武芸でも何でも無いじゃん。」

「相手が出るならともかく、出来ないんだからやる必要は無いだろ。私はただ・・・。」

後ろで歓声が上がった。決勝戦の相手が決まったらしい。

「あ。あれって。」

「テイカ知ってるの？」

「うん。毎年優勝してる人。毎年来るから知ってるの。」

残ったのはハンナが突っかったあのカイリキーだ。

「私はただ。あいつにあの言葉を撤回させるだけだ。」

そう言ってどこかへ行ってしまった。

「びっくりした。」

「何が？」

「ルークさんがあんなに感情的になるとは思わなかった。」

「うーん。確かに。」

確かにあの言葉は酷いがそこまで怒る事なのだろうか。
その事がいつの間にかハンナの頭から離れなくなっていた。

台に上がったルークはカイリキーに向き直った。
相変わらずルークを馬鹿にした顔をしている。

「ほう、残ったか。中々やるんだな。」

あのしゃべり方といい自尊心の強さといい見ているだけでもイライラしてくる。

「ルークー！乾酪^{チーズ}が掛かってるんだからしっかりしてよ。」

ハンナの声が客席の方から聞こえてくるが無視した。後で文句を言われるだろうな。

「もう一度言うが、あの言葉を撤回する気は。」

「無いゾッ！」

開始と同時に来た拳を避ける。そのすぐ後の上からの拳はやりを当てて力を逃がす。攻撃したいところだがカイリキーの四本の腕に邪魔されてなかなか隙ができない。

「逃げてばかりじゃ。勝てないぞ！」

確かに攻撃していない。むしろ押されている。

「何か見せてくれるのかと思ったら、何も無いのかよ。これで終わ

りだ！」

右から来ると感じルークは左足をカイリキ一のすぐ左に着け、膝を曲げて背中側へ回った。

「なにつ！」

「見たいなら見せてやる。だが後悔するなよ。貴様のバカにした、七氏族の槍を。」

穂先を下に向け攻撃態勢に入る。

「一ノ式、げっが月牙。」

瞬間、槍の先が消えた。

9話 対決（後書き）

ルーク「いい加減にこの訳の分からん話を終わらせてくれ。」
うーん、たぶん次で終わるか。

10話 月牙（前書き）

何かあっても無くてもどっちでも良い回になってしまいました。
ルーク「物語の進展もないし。最低の回だな。」
そこまでキツパリ言われると悲しい。

10話 月牙

月牙。それはこの国で槍を始めた者なら、必ずと言っていいほど初めに覚える型だ。

速さを追求した型でかなり上達すると、捕える事はおろか見る事すら困難になる。

一打目は見事にカイリキーの腹に当てた。防具を着けているとはいえかなりの衝撃だっただろう。少しよろけた。その出来た隙を見逃さず首筋に回転させた穂先を叩きつける。

「まずは、一。」

槍を引き、喉を突く。

「二。」

我ながら少し自分のやっている事が怖く感じるが、こつゆつ自意識過剰な奴にはこの位やらないと、何をしでかすか分からない。後ろののけ反ったカイリキーの胸を叩く。

「三。」

そのままもう一度首筋に叩きつける。

「四。」

そして完全にバランスを崩した所で押し倒し、首筋のすぐ横に穂先を叩きつけた。少し土が削られた。

「五回。」

数えていたのは、これが本物の槍だった時に死んだ回数だ。流石に本人でも分かるだろう。

「さあ、まだやる？」

冷え冷えとした声で尋ねる。

「貴方言っていましたよね。絶対勝てる。って。貴方の攻撃一度でも当たりましたか？」

当たってる訳が無い。今のに着いて来られるのは、七氏族とカイリユー、ガブリアス、ピジヨットぐらいだ。

「それでも勝てますか？七氏族に。」

「っ！俺の、負けだ。」

わっ！と客席から歓声が上がる。

これであの減らず口も少しは減るだろう。ルークは槍を抜き手を貸してやった。

「やったー。陥落^{チーズ} 陥落」

「バル バル」

「待った。これはタハに嚴重に保管してもらおう。」

大きな袋三つにパンパンに入っている陥落とバムを取り上げられると、ハンナはティカと一緒にルークに反論した。

「なんでよ。ちよっとくら良いでしょ。」

「駄目だ。これの所有権は私にある。私が何をしようが自由だ。」

「うっ。」

正論を叩きつけられると何も言えなくなる。だってそれが正しいのだから。

「でもっ。」

名残惜しい。

「まあまあ。じゃあ、ごうじましょう。半分は私たちが貰います。もう半分はどうぞ。」

「やったー。流石、タハさん。といゆうことだから食べていいですよ。」

「全く。」

ルークから陥落を受け取るうとして手を伸ばしたが、途中で止めた。

「?どうした。」

「ん。何でもない。」

首を振ってあれは幻だと自分に言い聞かせる。あの時、ルークは本当に怖かった。

ただ黒く、ただ深い。そんな感じ。

「すみませんでした。こんなに遅くに。」

「いえいえ、元はと言えば自分が調子に乗って飲み過ぎたせいですから。」

ルークは大会が終わるとすぐに、タハに車を開けてもらった。こんなにあつたら狭くて邪魔だというのだ。そんなに遅くは無かったのだがタハは完全に酔い潰れてしまっていたので、ティカが無理や

り叩き起こして今に至る。

「で、明日ですけどね。日が昇ったらすぐに出たいと思うんですけど。」

「旅の日程はすべてお任せします。」

「そうですか。ではおやすみなさい。」

タハとティカはそう言って部屋に戻っていった。

「何か聞きたい事でもあるのか？」

見送った後、ルークが唐突に聞いてきた。

「べべ別に。」

自分は隠し事をするのが下手だと、つくづく思う。ああ、なんでカミサマはもっと上手く喋れるようにしてくれなかったんだろう。

「消すぞ。」

ルークが明かりに手を伸ばす。

「あっ！ちょっと待って。」

明かりが消えて真っ暗になったがルークがいるだけで安心できる。まるで兄がいるみたいだ。

「お兄ちゃん……。」

もうすぐカトリシアに着く。そうすればお兄ちゃんに会える。その考えだけで頭がいっぱいになった。

10話 月牙（後書き）

次回はちゃんと物語を進展させます！
ルーク「その決心はどこから来るんだ？」

11話 安息の日(前書き)

あんまり話が進まなかった。

ルーク「まったく、うちの作者は。」

11話 安息の日

カトラル王国王都カトリシアの郊外にある店は、国王ラーク・セレンの行き付けだ。ほぼ毎日のように来るので店員のポケモンも慣れてしまつて何も言わない。今日ももちろんいる。此処に来ると何だか落ち着く。父と弟と初めて覗いた店がここだったからだ。

国王と言うにはほど遠いほど庶民派の彼は、このこのコーヒーが気に入る。今も金と橙の長い布を後ろに落とし、窓の外を眺めながらボーっとしている。

諸外国最年少国王ということもあり初めは色々苦労したが、一代王の見事な話術と、その妃の太陽のような目、さらに彼の性格から話術の天才と言われるまでになった。

カトラル王国では七人の領主と各領から二人ずつ選ばれる議員によつて構成されている。

だが現在、前セレン領主が病死。時期領主となる彼の弟も死んだ事になつている。仕方ないので、現在国王とセレン氏族領主の両方を兼任している。実質上の欠落だ。

それでもこんなに自由時間が取れるのは、彼の仕事の速さのおかげ。

「はあ。」

今のこの国には城の中だけの問題が多すぎる。ちゃんと領主を決めなければいけないのだが、彼が出来ると言っている以上、誰も何も言えない。

「国王。」

「何だ、ハクか。」

「やはり、此処に居られたのですか。」

店に来た彼はハク・カータ。カータ氏族領主だ。

「ハク。」

「はい?」

「その敬語やめてくれ。」

「止めません。それより、ケルトの事ですが、ゼブリンに頼んでおきましたけどいいですか。」

「ああ。」

近頃、ユーナ領主、ケルト・ユーナの行動がおかしい。仲間を疑うような事はしたくないが、仕方がない。

「それともう一つ。」

「なんだ?」

「先程、書物が届き国王の許可が欲しいそうなので城に戻ってください。」

「それ今じゃないとダメ?」

「勿論です。」

「仕方ないな。ああ、代金はここに置いていきますので！」

コーヒートの代金をテーブルの上に置き、腰をあげる。

「国王。領主はどうするのですか？」

「私の弟は生きている。必ず。それ以上もそれ以下も無い。」

ハクが分かったとでも言つように、目を下げた。

「早く戻ってまた図書館に行くんだから。」

そう言って二人は店を後にした。

「もうすぐ、セレン領に入るな。」

「えっ本当。じゃあ入るときになったら教えてねー。」

その頃こちらは砂漠の中、シャナを出発しすぐ東にあるのは、ユ
ーナ領とセレン領の境界だ。

「・・・今、入った。」

「ホントに？何も変わって無いけど。」

確かに、見渡す限り灼熱の砂の大地だ。

「突然変わる訳無いだろう。大地は繋がってるんだから。」

「そうそう、ルークさんの言う通り。あちこち移動してれば地図が
手放せなくなるから。所詮、国境なんて生き物が勝手に引いた線に
すぎなんだから。」

「ティカ。熱でもあるの。」

ハンナが隊商の一人娘のティカの額の手を置く。

「無いわよ！あたしがそんなこと言っちゃダメ？」

「確かに、雪が降るかもな。」

「お父さん！」

「ははっ。さあ、あともう一踏ん張りでカトリシアに着くぞ。」

「ねえ。カトリシアってどんなところなの？」

何も知らないハンナがルークに尋ねる。

「砂漠の真ん中に突然姿を現す。別名、蜃気楼の街。大陸最大級の大きさを誇るハクレイ湖周辺に栄えた、大きな街だ。」

「ふーん。で？」

「それだけだ。」

蜃気楼の街カトリシア。本当に美しく活気にあふれる街だった。かれこれ十八年間も行った事が無い。どうなっているのだろうか。

「まあこれでやっと国王に会えるんだし、そうすればお兄ちゃんを助けられるし。」

ハンナはやつと着いたという安堵感をすでに出しているが、ここからがまた長い、あと五日間、砂漠の中を進まなければ。

「さあ、出発しよう。」

タハが声をあげてカトリシアへ向かい歩き出した。

12話 屢気楼の街カトリシア（前書き）

いよいよ七氏族と接触。

ルーク「やっとここまで来たか、どれだけ待ちわびたか。」

12話 塵気楼の街カトリシア

砂漠を進み四日目の昼。

「あつあれ！」

いち早く気付いたのはハンナだ。指差した方には、ぼんやりと街の姿がうかがえる。

「見えたか。」

塵気楼の街、カトリシア。その名の通り突然、砂漠の中央に現れた幻想的な街。茶色っぽい街を覆う壁はたびたび起こる砂嵐から街を守るためのものだ。

予定より半日早く到着した王都カトリシアは、砂漠から見たものよりもずっと美しくずっと活気に満ちていた。ハンナの目に映るものはすべて初めて物で、目を飽きさせない。

「何所へ行くの？」

「国の機関だ。カトラル王国では商業税を隊商も払うことになっている。」

「ふーん。」

しばらく行くとカトラル王国の国章が掲げられている建物に着いた。そこで許可証をもらい街から、出るときに税を払うというようになっている。

それよりもハンナの目を引いたのは、カトラルの国章だ。青い長方形の布の下を三角形に切り、赤く縁取られている。その布に描かれているのは、太陽と月だ。

「ねえ。あれどどういう意味なの？」

旗を指差してルークに尋ねる。

「太陽は平和。月は正義。青の布は自由を示す空。赤い淵は砂漠だ。ちなみに国王の名、ラークは太陽を現すルアーと光という意味のカウを合わせたものだ。意味は、平和の象徴。」

「じゃあ、月の方は。」

「？」

「月の意味を持つ人はいないの？」

「・・・国王の弟は死んだ。十八年前に。」

ルークが言い切ったのを見計らったようにティカが出てきた。

「ハンナちゃん！」

「ティカ。もうお別れだね。」

「寂しいよー。やっと友達が出来たのにー。」

ティカはハンナに抱きついて泣いている。

「有難うございました。出来ればずっといて欲しいんですけどね。貴方のような人は滅多にいませんから。」

「私なんかいたって邪魔なだけですよ。所詮用心棒なんですから。」

「そうですか。また会えるといいですね。」

タハが握手を求めた。

「私のような仕事をしていると、未来の事は約束しないんですよ。」

ルークはタハの握手に答えた。タハは残念がった様子でルークを見ていたが諦めたように笑って言った。

「そうですか。」

その後、ハンナとティカは別れを惜しみながらも、それぞれいるべきところへ戻り、タハ達が見えなくなるまで手を振っていた。

「それじゃあ行きますか。」

ハンナが城の方へ向って歩き出す。

「おい。簡単に王に会ええると思ってるのか。」

言っても無駄だった。ハンナとルークは雑踏の中に消えた。

城の前。

「ですから。国王は今、外に出ておられているんです。」

必死に言ってる門番の声などほとんど耳に入っていないハンナは
たまらず怒鳴り返した。

「じゃあ国王がどこに行つたか教えなさいよ！」

「それは分かりません。」

「何だよあんた達門番なんですよ！」

「やめるハンナ。」

ルークの忠告を無視して突っかかっていると、

「何の騒ぎだ。」

「ゼ布林様！」

門番がピシッと姿勢を整える。そこは紫色の布をなびかせているガブリアスがいた。紫はジャータ氏族の色だ。つまり彼は、ジャータ領主、ゼ布林・ジャータだ。

「何の騒ぎだと聞いている。」

「彼らが国王に面会したいというのですが、国王は先程出かけられてしまつて。それを説明しているのですが……。」

ゼ布林の目がこちらを向いた。その時、少し口が動いたが、何を言ったかは聞き取れなかった。

「彼らの言っている事は本当ですから、本日はお引き取り下さい。」

穏やかで一見、隙がなさそうだが、動かす手足に無駄な動きは無く目は二人の動き一つ一つを逃さない。

「ハンナ、帰るぞ。」

「えっ、ちょ、何で。」

「失礼しました。」

ハンナの手を無理やり引っ張つて、いったんこの場を離れた。

「ちょっと何なのよ！」

ハンナが怒った口調で言う。

「馬鹿かお前は。七氏族に喧嘩を売る奴がどこにいる。」

「七氏族？あの人、七氏族なの！」

「無知にも程があるぞ。」

「でも大丈夫でしょ。ルークがいるし。」

「ハンナ。私を最強とでも思ってるのか。私は一介の用心棒、七氏族になんて敵う訳が無い。彼らは隠密性を重視したカトラル最強部隊だ。音無く動き、敵の攻撃を粉碎する。」

もつと言えば、カトラル王国の戦術は奇襲戦が基本だ。敵の部隊を追いこみ叩き潰す。

「でもルークはそれと同じくらい速いでしょ。ティカもそう言った。」

「……。」

確かにというより当り前だ。私は……。

「それより。宿を取る。国王を捜すのはそれからだ。」

翌日の昼。

二人はカトリシア市内を南に進んでいた。石でできた壁には砂が付き茶色くなっている。所々にカトラルの国章が掲げられている。確かエクが建国祭があると言っていたような。

「ねえ。そっちは城と反対側よ。」

ルークは相変わらず城から延びる大通りを南に向かってる。

「良いんだ。」

しばらくするとルークは立ち止まった。

「一つ聞いておきたい。」

「何？」

「本当に国王に会いたいのか？」

「当たり前じゃない！」

でないとここまで来た意味が無い。

「じゃあ。」

ルークが横にずれる。

「何所？」

「あそこだ。」

ルークが指差した方には、普通にお茶を飲んでいる金色と橙色をした二つの布を首に巻いているフライゴンがいた。

「えっ！」

「あれがカトラル王国国王ラーク・セレンだ。」

そこにはハンナが想像していたよりもずっと若いフライゴンがいた。

12話 屢気楼の街カトリシア（後書き）

ハンナ「国王ってこんなに若かったの！」

ルーク「だから言っただろ。本当に会いたいのかって。」

ラーク「ホント勝手な想像は辞めて欲しいよね。ルーク。」

ハンナ「何で名前知ってるの。」

ラーク「それは次回。」

13話 カトラル国王ラーク・セレン（前書き）

国王登場！実はカトラル七氏族が一番気に入ってたりする。

ラーク「ほー。では私はどうでもいいと。」

いやそうゆう訳では・・・。

ラーク「問答無用。」

13話 カトラル国王ラーク・セレン

国王ラーク・セレン。諸外国最年少国王と言つのはのは裏腹に、
話術の天才の異名を持つ。

カトラルが仲立ちに入れば、どんな国際戦争でも収まるというの
は言い過ぎだがそこまで言わせるほど頭のキレる国王だ。

「……もう良いだろ。行くぞ。」

「どうして？国王に合わないの？」

「良いから。」

彼は悪くは無いと分かっているながらも、奥底に埋めた苦い記憶が
甦ってくる気がした。

ハンナも渋々ついてきた。

わざと帰りは細い道を何度も曲がりながら帰った。

「何でこんな道を通るのよ。大通りで良いんじゃないの？」

ハンナが不満を口にする。無理もない、細い裏道は時々大通りに
抜ける道があるだけで、あとは全部茶色っぽい壁に挟まれた空間だ。

「ねえってば。」

ハンナが反応しないルークの腕を掴んだ時だった。

「ルーク！」

突然の声に足を止める。振り向くと建物の影から緑色の体をしたポケモンが、姿を現した。金色の布がやけに眩しく見える。

「やっと見つけた。ルーク。」

「……。」

ルークは、突然現れた国王ラークに無言で対峙した。

えーっと。とりあえず、状況を理解しよう。突然国王が出て来て、ルークを知っているような感じだし。しかも捜してるって。ルークは何も言わない。やっぱり訳が分からない。

困っているのは勿論ハンナだ。突然の事に全くついていけない。

そうこうしている間に話は進んでいた。

「ルーク。やっぱり生きていたんだな。良かった。」

「.....」

ルークは目を逸らしたまま何も言わない。じれったくなってきた。
しまった。

「なんなんですか。突然来て。説明して下さい。」

ラークはハンナがいる事に今、気付いたようだった。少し驚いた
様子をしたが話してくれた。

「私は、カトラル王ラーク・セレン。そして彼は.....」

「ハンナ。」

弱いルークの声が聞こえた。ルークの様子がおかしい。何時もな
らもつと相手を押し離すような、そんな感じだが。今は巢から追い
出された生まれたばかりのポツポの様だ。

「ル.....」

「五月蠅い！たまたま同じ名前だったただけだ。貴方の弟は死んだ。
十八年前に。私と貴方には何の関係も無い！」

ルークが腕を掴んできた。

「行くぞ！ハンナ！」

「えっ！ちよ。！！」

その時、ルークの感情が流れ込んできた。

『何故、見捨てたんだ。私は貴方の為に生きていたのに。』
そこで消えた。我に返ったハンナはルークを止めに掛かった。

「ちょっと。ルークと待つて。」

前に飛び出し顔を見る。冷たくて透明そうだった目はくすんで、瞳が虚ろになっている。だが、少し目の色が戻ったようだ。

「カトラル王国弟王、ルーク・セレン。伝えたい事がある。」

ラークが声を変えて話しかけてきた。

「こちらにも伝えたい事があります。そちらに、ラティオスと青い水晶玉があるはずですよ。」

ルークもちゃんと目的は忘れていない様だった。そこには安心して、国王の言った『弟王』が気になる。

「何の事だ？」

国王は首をかしげる。本当に知らないらしい。

「調べて下さい。三日後の暮の7刻に、南の広場の裏で。」

「分かった。では、こちらの話だ。母上が亡くなった。」

ビクツとルークの体が反応した。

「三年前だ。」

「……私には関係の無い事です。」

ルークは国王を見ずに立ち去った。ハンナはその後を追った。

しばらく歩いているとルークが喋り出した。

「ハンナ。すまなかった。」

「何でルークが謝るの？謝るのはあの国王の方でしょ。……あ。」

ルークがこちらを見ている。本当にウソをつくのが苦手だ。

「いや、あの、その〜」

「分かっている。見えただろ。私の事。」

「……うん。ごめん。」

少しうつむき加減に様子をうかがう。

「謝る必要は無い。どうせ隠し通せるとは思っていなかった。」

上を向いてルークは続ける。

「私の正体は、現カトラル王ラーク・セレンの双子の弟、セレン氏族の血を引くルーク・セレンだ。」

13話 カトラル王国ラーク・セレン（後書き）

ハンナ「えっと。国王がルークを捜していて、ルークは国王に会いたくなかった。訳が分からないよー。」

ラーク「次回でハンナちゃんにも分かる説明があるよ。たぶん。」

14話 月の真実(前書き)

こづゆづの書いたの初めてなので分かりにくいかもしれません。

14話 月の真実

太陽は平和、では月は。月は闇を抑え夜の住民からポケモン達を守る、闇の監視者。ラウーは、月。カウは、光。その名を継ぐ者は、
「ルーク・セレン。」

セレン。確かに彼は言った。カトラル七氏族の血を引いているとも言った。

今思えば、確かにそうだ。ハンナは宙に浮いているから足音は立たない。けれどルークは地面に足をつけている。にもかかわらず、足音がまったく立たない。あのゼブリンと言う領主も、同じ歩き方をしていた。

「そう、私はお前の兄を傷つけているかもしれない者の血を引いている。怒っているか。当たり前か、お前を裏切っていたんだから。」

ハンナは首を振った。確かにそうだったとしても、今まで助けてくれたのは彼自身だ。血がどうの関係ない。

「まあ、弟とは言っても籍はとっくに失っている。私はこの国から逃げ出したんだから。」

いつの間にか、宿に戻ってきていたらしい。ルークは窓の外を見る。湖の湿気で柔らかくなった太陽の光が顔に当たる。

「私を逃がしてくれたのは、母上と、その時のカータ氏族領、カイ・カータ。隣国ガレンへ一緒に逃げてくれた。自分の破滅を意味しているのにもかかわらず。」

「じゃあ、何で戻ってきたの？」

「今までの自分を断ち切ろうと思って。全て始まったのがこの国なら、終わらせるのもこの国だ。」

「。。。。。」

彼の言う通りだ。と言う事はハンナはその目的を邪魔したことになる。

「そんな事は無い。」

ルークが頭の中を見透かしたように言った。

「これは、私の本心からだ。私と同じような事になってほしくない。」

窓から離れて寝具に座る。

「私は一体何なんだ。」

「えっ？」

「カトラル七氏族は、王を守るために戦う。民は国を支えるために働く。それに比べて私は国を持たない。自分の血を敵の血で流すような生き方をしてきた。それでは、お前の兄を奪った奴らと同じだ。」

「違う。」

「同じだ。」

「違う！」

ハンナはルークを押し倒した。まるで、砂に突き立てた棒のように何の抵抗もなく倒れた。

「・・・ハン。」

「違う。絶対違う。ルークはそんなじゃない。もしそうだったら、私は此処にいなかった。」

「・・・。」

「あたしなんて一人じゃ此処まで来られなかった。来れたとしても、お兄ちゃんを探すなんてとても出来なかった。」

相変わらずルークは黙り込んでいる。

「ルークは、あたしを守ってくれた。それにそれ以外で誰かを傷つけた事は無かった。だから、だから・・・。」

最後は、半分泣きながら喋っていた。顔をあげるとルークの顔が見えた。

「絶対に違う。」

ルークはハンナの頭に無言で手を置いた。

「有難う。」

見るとルークの頬に光が見えた。喉が少し震えている。

「・・・何年も前に枯れたと思っていたが、まだ残っていたらしいな。」

ルークは自分の涙を拭いて黙ってしまった。

「シャワー浴びてくる。」

「ああ。」

そっとしておいた方がいいと思い。ハンナはそっと部屋を出た。

ルークが寝具から起き上がったのは、空が暗くなっている頃だった。ハンナと話しているときはまだ明るかったから、いつの間にか

寝てしまったらしい。ハンナはまだ居ない。気でも使っているのだろうか。

暗いので灯りに火をつける。炎の光が壁に影を作る。頭がぼんやりしている感じがする。こんな感じは初めてだ。

することも無く、ただただ影を見つめる。影はルークの心を映したかのように、絶えず形を変え動いている。

その時、ルークの耳が窓の外の音を捕えた。

初めはハンナかと思った。

が、違う。ハンナの立てる音に比べてテンポが早い。

危険を感じて身構えた瞬間、木でできた窓が壊れ風で炎が消えた。

15話 奇襲(前書き)

ちよつと少なめ。

ルーク「いつもの事だろ。」

そうです。

15話 奇襲

光の無い闇の中で二つの影が争っている。
一つはルーク。そしてもう一つは……。

「！」

首に風を感じとつさに避ける。すると、そこに鋭い爪が通ったよ
うな音がした。

さつきから首を狙っているのは明らかで何度も擦れ擦れで避けて
いる。

「チツ。」

二度目の攻撃の前にルークが攻撃を当て、弾き飛ばす。
すかさず、敵は首を狙い飛びこんできた。

これではキリがない。
攻撃を弾き敵の『音』がする方へ体を向ける。

「来い。私を殺すのだろ。」

『音』が動いた。とつさに下にあった毛布を、敵に投げつける。

毛布は開いて、敵の視界を遮る。その隙に足を払おうと、敵の足
元にドラゴンクローを放つ。

しかし、気配を感じ取られて避けられた。

とつさに間合いを取り、敵の気配を探しながら自分の気配を徐々
に消していく。

「！」

「動くな。」

敵が動いた時、半歩横へずれ攻撃を避けると同時に敵の後ろへ回り込み首筋に爪を立てる。

「何者だ。」

答えない敵にさらに爪を立てる。その時、何か鋭い物が飛んでくる気配を感じ上体を反らす。

「ッ!」

目の下を薄く切った攻撃の際にドラゴンクローを放つ。切り付けた感覚と何かを破る感覚があった。

「チッ。」

「待て!」

敵は身を翻すと、窓から飛び降り夜の闇に消えた。

「.....」

ルークは外の様子を注意深く調べると、明かりを灯した。丁度、ハンナが戻ってきた。

「チヨツ。何？何があったの？」

ルークはハンナの次々に来る質問を、適当に受け流した。

いや、質問すら耳に入っていないかっただかもしれない。
手の中にある布の切れ端を、ただ見ていた。青の地に太陽と月が
描かれた切れ端を……。

翌日、ラーク・セレンはすぐラティオスと青い水晶を調べようと
した。

「ラーク様。」

「！なんだユシールか。」

後ろにいたのは、リン氏族領主ユシール・リンだ。彼はいつ
も酔ったリトルナに絡まれてラークに飛びついてくるが、今日は違
っていた。

「何があった。」

嫌な予感がした。

「ケルトが、いなくなりました。」

「なに！ゼブリンはどうした！」

「ゼブリンも……。」

「分かった。ユシールはゼブリンを探してくれ。」

「ケルトではなく、ゼブリンですか？」

「そうだ。今すぐ！見つかったら報告しろ。」

ユシールは黙礼をして立ち去ろうとした。

「待て。」

一声かけてユシールを呼び止める。振り向いたユシールに付け加えた。

「翌日、私は部屋から出ない。」

「？それはどの様な……。」

「ユシールの考えている意味と同じだ。」

「分かり……ました。」

ユシールは再び黙礼すると、今度こそ立ち去った。

「（私の思い過ぎでしたと良いが……。）」

ラークは急ぎ足で、城の地下にある書物庫へ向かった。

15話 奇襲（後書き）

ハンナ「ルークがだんだん冷たくなってきた気がする。」
気のせいでしょ。

ハンナ「もしかして、ルークの朝食全部食べたからかな？」
それだ。

16話 心の罅(前書き)

わお。初めてこんなに書いた気がする。

ルーク「この位、他の作者さんなら簡単に書いてるぞ。」

うっ。そんなこと言われなくても分かってるよ。

16話 心の雫

年を通して乾燥しているカトラル王国には、百を超える図書館がある。そこには経済学から天文学、文学、さらには外国の物語まである。それは国にある学校の宿題に追われる生徒の強い味方である。大半は公開されているが、それ以外の準機密書物は、全てこの城の地下にある。先程も言ったとおりカトラルで書物の天敵である湿気が無いカトラルでは、日焼けが一番の天敵だなので書物はすべて地下にある。

書物庫の戸を開けると、ひんやりとした空気と共に、繊維紙独特の木の匂いがした。

彼、ラク・セレンは暇な時のちよくちよく図書館に出向き本を読んでいたのも、大半が頭の中に入っている。

だが、この書物だけは特別で、何度読んでも飽きない。玉に何代も前の王の日記のような物が見つかるので面白いからだ。

しかし、今の目的はそんな事では無い。

彼は、壁一面、天井まである棚の一角から両手いっぱい書物を持ち出し、蝋燭と一緒に机の上に置いた。

これは、カトラル王国にある宝物を五十音に全てまとめてある。

しかも、模写付きだ。

机の上にある約三十冊、三百頁以上ある本をを^{ページ}上から順にめくっていく。

彼の仕事の早さは、字を読む速さからなるものなので、この位半刻ほどあれば、全て読む事が出来る。

だが、今回は模写さえ見れば分かる事なので、それよりも早く終わりそうだ。

全て読み終わると、彼は天井を見上げ目をつぶった。一つ一つ本に書かれていた事を思い出していく。

「記録・・・無か。仕方ない。」

本を棚に戻し、蝋燭を持ってある一角にある棚の前に立つ。そして、棚の横にある石壁の一つの石を強く押しこむ。

ゴトツと音を立てると別の一角の石が飛び出す。そこにある穴に念のために持つてきた鍵を差し込む。

鍵はなんの抵抗もなく入り、ゴトツという音と共に目の前の壁が口を開けた。そこには、さらに下へ行くための階段がある。

宝物庫への入口だ。

別に隠している訳ではないが、城を立てた時の王がカラクリ好きだったためこうなっている。

他にもカラクリが幾つかあるが、あまり使わない部屋なので大して影響は無い。

宝物庫は昼間だというのに暗く、冷たい。ラークは四隅にある燭台に火をつけ、一つ一つ調べ出した。

一通り調べ、最後の棚の上にあるの物を取る時、何かを足に引っ掛けた。

「えっ。うわっ！」

下に降ろそうと思っていた物が想像以上に重くバランスを崩して転んでしまった。

「痛ー。」

頭を押さえて立ち上がると、取り出した物の奥に記録に無い物を見つけた。

「何だ？」

箱を取り出して見る。木製の箱で紐で蓋が開かないようになっている。

中を確かめると、そこには自ら青く光り輝く水晶玉があった。

「これは？」

「教えて差し上げましょう。」

「！」

振り返ろうとしたが遅かった。頭に衝撃が走り床に倒れこむ。

水晶玉が目の前に転がってきた。それを取り上げる何者かの腕も見えた。

「お前は……。」

体を起そうとしたが、頭が痛くて体が動かない。

「国王。これは『心の雫』と言います。ラティオスとラティアスの力を最大限引き出す宝石です。」

「心の……雫？」

「貴方は俺に監視を付けたようですが、それは俺が斬りました。」

「！ケルト……。一体……。彼に何を……。」

そこで記憶が途絶えた。最後に「あの二人には、すでに手を打っておきましたから。」と言ったような気がしたが音としてしか捕えられなかった。

約束の時間になっても国王が現れない。二人は途方に暮れていた。

「ねえ。なんで来ない訳。」

「国王は絶対に来る。自ら約束を破るような人じゃ無かったはずだ。」

ハンナの問いにルークが答える。
建国祭の楽しいげな音楽とは正反対の真っ暗な路地裏だ。ハンナが五月蠅く言うのも分かる気がする。

「！」

「どうしたの？」

「誰が来る。」

「聞こえないけど。」

見えない敵の音に耳をすましていると、

「いたぞ！」

突然の攻撃。

「逃げるぞ。」

「えっ？うわっ！」

ルークはハンナの腕を掴んで飛び出した。

この前の夜襲ってきた奴が、一人では勝てないと踏んで数押しで来たらしい。

角を曲った。

「ちよつとルーク！行き止まり！」

しまった。と思ったが遅い。地の利は千の兵を持つものと同じだ。三つの面を壁が囲み、目の前に追手がいる。上空は、撃ち落とすてくれ。と、言っている様なものだ。

考え、一つの案が浮かんだ。

「ハンナ。」

声を低めてハンナを呼ぶ。

「私が合図をしたらミストボールを足元に打ち込め。」

「分かった。」

「行くぞ。」

ハンナが身構える。ルークは近くにいた敵を遠くに飛ばした。

「今だ！」

ハンナの打ったミストボールが地面に当たり、周囲が霧に包まれる。

「大地の力。」

その後ろに大地の力で高い壁を作った。

「ハンナ。飛べ。」

二人は、その壁の内側を通るように飛び立った。

「一体、何なのよー！」

「ジャータ氏族の兵だ。とにかく城に乗り来む。国王を捜す。」

ハンナの問いにルークは目も向けずに答えた。

「国王が仕向けたんじゃないの。」

「それは無い。仮に、そうだったなら、こんな事せずに自分から来ればいい。ましてや話術の天才だ。となると、下手をすると敵は六人。それ以下だと良いが。」

「六人？七人じゃ無くて？」

「国王は除外して、あと一人は目の前にいる。」

忘れていた。セレン氏族領主は、欠落していてそれがルークだった。

「急ぐぞ。」

スピードを上げて、二人は城に向かった。

17話 反逆者(前書き)

ハンナ「ヤバイ!ヤバイ!!ヤバイ!!!」
何が?

ハンナ「だってこんな展開になるとは。」

17話 反逆者

城の前には門番がいる。一人は体付きの良いザングース、もう一人はすばしっこそうなポニータだ。

「あ、あの〜。」

「ん？」

「ちょっと良いですか？」

「何でしょう？」

「え、えーっと。」

しまった。そこまで考えてなかった。門番の気を引きつけている間にルークが後ろから襲うという計画だったのに。大体、あたしのこんな事させるのが無理なのよ。

ハンナは心の中でルークを恨んだ。

それは門番の言葉で中断された。

「何、迷子？」

ポニータがザングースの後ろから顔を覗かせる。

「さあ。とりあえず近くの……。」

門番の言葉が途切れ、前に倒れる。

「お、おい。如何したん……。」

もう一人の門番も倒れた。その後ろにはルークがいる。

「済まない。ギルク。」

「ルーク。あたしにこんな役押しつけないでよ。」

ハンナが不満を漏らす。

「仕方ないだろ。私だと気付かれるかもしれない。彼は私の面倒をよく見てくれていたから。」

ルークがザングースを指差す。

だから謝ったのか。

「行くぞ。」

一人で納得しているハンナを、ルークは容赦なく急きたてる。見付かったら、台無しだ。

ハンナもルークを追って城内に忍び込んだ。

途中、何度も角を曲がり巡回の兵をやり過ごす。

「おかしい。」

「何が？」

「何時もは、こんなに見回りは居ない筈だ。ましてや祭りの時に。」

「変ったんじゃないの？知らない内に。」

「そんなものなのか？」

「層でしょ。それよりどこに向かっているの？」

「地下牢だ。もし、捕まっているのならそこにいる可能性が最も高い。」

見回りの兵が行ってしまったのを確認すると、地下へ向かう階段へ急いで向かった。相変わらずルークは足音が立たない。やっぱり嘘じゃ無いんだ。

地下牢の前の兵を音も無く倒すと、鍵を拾い、一番奥の戸を開けた。これはハンナの勘だ。

戸を開けてハンナが入った後に、ルークの中に滑り込んだ。その時、

ドンツ！という音とともにルークが消えた。

ラークは、固い地下牢の床で目を覚ました。殴られた衝撃でまだ頭がククラクラするが、支障は無さそうだ。

それよりも、外がなんだか騒がしい。

僅かにある隙間から外の様子を覗いてみると、入口を守っていた兵が突然倒れた。

「！」

しかも、誰かがこちらに来る気配がする。

ラークは天井に張り付き少し待った。しばらくすると扉が開き、二人誰かが入ってきた。意を決して二人目の方に飛びかかる。

「貴様ら！私をこんな目に合わせてただで済むと……。」

「ラークさん?!」

聞き覚えのある声。

「……その声は、ハンナちゃん……だっけ。」

目の前には、一度だけ見た事のある顔があった。

「ラークは？」

「国王、降りて頂けませんか。」

下から声がする。見るとルークの上に見事に着地していた。狙ってやったのだから当たり前か。

ルークが、やれやれと立ち上がる。

「ルークさん。何があったんですか？」

ハンナが聞く。

「！そうだ、ケルトは・・・。」

言いかけた時、大きな揺れがおこった。

「何、地震？」

「いや、こんな所で起こる訳が無い。」

「とにかく外へ。」

ルークのとつきの判断に従い、三人は外へ飛び出した。

上では、大変なことになっていた。

暗闇に、半透明の鎌の様な物が、形を変えながら動いている。

「これは……。」

「この感じ、お兄ちゃんの力だ。でも何で？」

「ゼブリンです。」

声がした。怒鳴っている訳では無いが、凜と通るその声の主は、

「ケルト！」

その様子にハンナは目を背けた。ケルトの真つすぐだった白い毛は血で赤く染まり、右目は血で開けられない。足はふらついて立っているのがやつとの様だ。

「国王、申し訳ありません。」

「謝る必要は無い。私が頼んだんだから。それより他の皆は。」

「ラーク様！皆、居たぞ！」

廊下の角から飛び出してきたのは、ファラルスだ。他にも全員が集まって来た。

「ラーク様。一体何が。」

「ゼブリン。ジャータ領主ゼブリン・ジャータだ。」

ユシールの問いにラークが答える。全員がラークを見つめる。

「ああ、彼はラークだ。」

領主の間に不審の色が流れる。無理もない、ラークの籍はとつくに消える。

「ラークは味方だ。それより……」

ラークが目を逸らす。

「仲間と戦う事になる。良いか。」

ラークの問いに、ケルトが、ファラルスが、ハクが、リトルナが、ユシールが頷く。

「我々は、この国と貴方を守るための存在です。」

ハクが言った。

「我々はここに新たに誓いを立てます。」

「よし。」

ラークが状況を確認して振り返らずに言った。

「ファラルス。兵を連れて西へ。」

「了解。」

「リトルナ。同じく東に。ユシールは南だ。」

「OK。」

「はい。」

「ハクは、上空。」

「ハッ！」

「ケルト、行けるか？」

「勿論です。」

「ではケルトは東だ。良いか！絶対に城の敷地内で食い止める。爪の先一つも街へ出すな！」

全員が再び頷き、それぞれ命令を受けた場所へ行く。

「ルーク。」

「……。」

「中は任せた。」

「……フツ。言われなくても。」

ルークは近くにあった実戦用の本物の槍を手取る。

「ハンナ、行くぞ！」

「うんっ。」

ルークが行ったのを確認して二人は城の中へ駆け込んだ。

18話 突入

城に飛び入ってすぐに見つけたのは上の階へ行く階段だ。しかし、すぐには通してくれない。ゼブリンが自分で雇ったと思われる兵が、行く手を阻む。

「そこを退けっ！」

ルークが左の掌で一回転させた槍を、敵の足元に滑らせるように動かす。

何が起こったか分からぬまま、敵は床に倒れる。そのすぐ横を、二人は駆け抜けて行った。

ハンナはルークの持つている槍を見てしまった。

穂先から、赤い液体が垂れる。それは見なくてもさつき倒れた敵の血だと分かった。

「大丈夫か。」

ルークが少し後ろを見ながら尋ねる。その顔には、返り血が筋の様に付いている。

「さつきの奴らなら、大丈夫だ。足の腱を切っただけだ。また動けるようになる。」

そういう問題では無いが、ルークは気付いていない。ハンナは動かない口を無理やり動かした。

「だ、大丈夫。そ、それより…本当にこっちで良いの。」

「勿論。さつき見た限りでは、あれは一番上の階から出ていた。ゼ
プリンがいなくても、あれを止められるかもしれない。」

ルークの目を見ると何も言えなくなる。

「ハンナ、行け。」

ルークがハンナを少し急かしながら、階段を登らせる。

「ルーク！」

下から、さつきよりも多くの兵が見える。

「先に行け。」

それだけ言うと、ルークは後ろを向き敵と対峙した。

穂先を、死なない程度に敵に突き立てる。それでも向って来るのは、数の利によるものだろう。

下から襲ってきた敵のこめかみを、振るった刃が掠る。そのまま槍を半回転させ、石突で敵の胸を思いつきり叩く。

「ぐっ」

バランスを崩した敵を、後ろにいる敵ごと階段下まで突き落とす。ここが狭い階段で良かった。

残った数人を、すかさず槍で昏倒させハンナの後を追う。

流石にかなりの数を倒して、この階段はきつい。息を落ち着かせながら登って行く。

「ルーク！良かった。」

螺旋階段の上からハンナが顔を覗かせた。

「ハンナ、何故行かなかった！」

「だ、だって……。」

問います。少しきつく言い過ぎたかも知れない。

「ハア！とにかく行くぞ。」

上へ行くようにして上げた足を止める。

「ハンナ。」

「なに？」

「私は好きでやっているんだから、此処で傷つくのは自分の責任だ。ハンナが責任を感じる事は無い。」

「でも……。」

「分かったな。私はお前が一人で泣いている姿なんて見たくない。それだけなんだから……。」

「……うん。」

良く分からずに出てきた涙を拭いて、小さく頷く。
ルークは、足を進めた。

しばらく何の変哲もない階段を上ると、部屋に着いた。窓が有り、月の光で十分周りを見渡せる。

「あ、階段があつた。」

ハンナの指差す方には、確かに階段があるが、誰もいないのが逆におかしい。

耳を澄ます。

「ハンナ！逃げろ！早くそこの階段を上げ！」

「えっ」

とっさにハンナを階段に突き飛ばした。真横からの突然の攻撃は

槍では防げないと判断し、とっさにドラゴンクローで受け止める。
重い！

そのまま力押しで飛ばされそうになるのを、床を転がり抑える。

「ルーク！」

ハンナが声を上げる。

「行け！早く！」

叫ぶと同時に、二撃目がルークの腕を捕える。

「くっ。」

痛みに顔をしかめたルークの目に、紫色の布が映る。

「死んだ筈のセレン領主が生き返ったか。」

「ゼブリン・ジャータ。貴様何をしているのか、分かっているのか。」

「分かっているなかったら、やっている意味が無いだろっ！」

言い終わると同時にドラゴンクローで斬りつける。

「くっ！」

ルークもドラゴンクローでそれを止めた。

ドラゴンクローは腕を竜の力で保護、鋭敏化させ攻撃する。その
為防御としても使える。筈だった。ルークの攻撃を防いだ方の腕か

ら血が滴り落ちる。

「その程度か。」

「五月蠅い。」

ゼブリンが喋っている間に後ろに回り込み背中を斬りつける。
決して深くは無いが、動きは鈍るはずだ。

「面白い。」

「こっちとしては早く終わらせたいが……。」

息を整えて対峙する。既に攻撃態勢に入っている。

「そんなこと言っなよっ！」

終わりと同時に、戦いが始まった。

「クッ！」

ルーク達が、ゼブリンを止めに行った一方。七氏族は苦戦を強いられていた。

叩き落としても叩き落としても一向に数が減らない。それに、動きが段々捉えにくくなってきた。

「ケルト！避ける！」

突然の声に我に返ると、目の前に鎌が襲い掛かってきていた。

「しまっ。」

「リーフストーム！」

避けられないと身構えた時、横から大量の鋭い葉が飛んできた。

ユシールの得意技、超遠距離からのリーフストームだ。

鎌はズタズタに引き裂かれ地に落ちた。

上を見るとハクが、雷で一気に十本ほどの鎌を焼き落とした。

「！かまいたち。」

ケルトの周りの空気の渦が、ユシールを狙った鎌を斬る。

しかし、直ぐに別の鎌が襲い掛かり休む暇が無い。
兵士達もかなり傷付いている。

「良いか！一つ残らず叩き斬るぞ！我々は『夜闇の疾風』ユーナ氏族の民だ！」

ケルトが兵を励ます。

「行くぞ！」

「オー！」

兵が答える。ケルトは怪我を忘れ飛び出した。

19話 ラティオス

薄闇の室内に火花が散る。

ルークの腕は既に血だらけで、脂汗が流れる。

さっきからゼブリンは戦い方を変えてきた。ドラゴンダイブを主体とした高速戦闘だ。

攻撃を当てる事は愚か避ける事すら難しい。

それに当てる寸前ドラゴンクローで斬りつけてくる。まるで、空気が鋭い刃のようだった。

「うっ！」

背中に痛みが走った瞬間、既に反対側の壁に叩きつけられていた。砕けた石の破片がパラパラと落ちる。

「とっさに受け身を取ったか。しぶとい奴だ。」

「・・・黙れ。」

「まだそれだけ喋れるのか。時間はある。さっさと終わると暇になるから丁度良いが。」

「貴様・・・ハンナを追わなくてもいいのか・・・。」

「何・・・。」

さっきから気になっていた事だ。此方を相手にしているよりも、ハンナを止めた方が断然楽である。

「どうせあいつには止める事は出来ない。」

「・・・どういう!」

突然のドラゴンクローを紙一重で避ける。石でできた壁にひびが入った。まともには当たたらひとたまりもない。

「聞きたいなら、俺に斬られながら聞け。」

再びドラゴンクロー。それをギリギリで避けアイアンテールを放つ。

捕えたと思った瞬間、ドラゴンダイブで消える。

「くそっ!」

「教えてやる。心の雫はあの二体の魂の欠片を結晶化させたものだ。」

後ろからの声。だが、完全に反応が遅れた。左肩から脇腹の辺りまで傷ができる。

壁に正面からぶつかり、口から血が流れる。

「あの結晶は奴らの体の一部とも言ってもいい。」

ゼブリンが頭を押さえつける。

「それを壊したらどうなるかは、奴らがよく知っている。」

ゼブリンの声が夜の空気を更に冷やした。

長い階段を上りを続ける。

「な、何なの。」

着いたのは広い部屋だ。だが、窓が無く、真っ暗だ。ただ有るとしたら奥の方に機械的な光が見える。
引き込まれるようにハンナはそちらに向かって行った。

「！ お兄ちゃん！」

ハンナが見た物は、宙に浮かび回転している三つの輪の中央にいる。傷ついた兄の姿だった。

「お兄ちゃん！しっかりして！」

大きな声で呼びかけると、ラティオスの苦しそうな臉が少し開いた。

「ハン・・・ナ？」

「良かった。お兄ちゃん今、助けるから。」

少し離れて、頭突きをする。頭の先側に少し触れた時だった。電気が流れたような痺れに、悲鳴を上げ床に倒れた。

「ハンナ！」

「うつつ。大丈夫。もう一度。」

何度も同じ事を繰り返す。しかし全く状況は変わらなかった。

「ハアハア。もう一度。」

「やめろ、ハンナ。もうボロボロじゃないか。」

「やだ、止めない。」

もう一度体当たりをするが、また弾かれる。

「ハンナ！」

「やだ。絶対、絶対お兄ちゃんを助けるの。いつもお兄ちゃんに助けてもらってたんだもん。こんな時くらい……。」

ハンナは泣きそうになるのを堪えて、もう一度体当たりをしようとする。

「やめろ。やめてくれ。」

ラティオスが悲痛な声を上げる。

ハンナが立ち止まって苦しい筈なのに笑っている兄の姿を見た。

「もう良いんだ。」

「お兄……。」

「ハンナ、あれを壊せ。」

ラティオスが指差した方には青く光る水晶、『心の雫』があった。

「何言ってるの！そんな事したら……。」

兄の赤い真剣な目を見たら言葉が詰まってしまった。

ラティオスは、死んでも良いからもう誰も傷つけたくない。と訴えている。

「……分かった。けど約束して！絶対、あたしを一人にしないで。」

ラティオスが小さく頷くのを見て、ハンナは涙をこらえて心の雫

の前に立った。

「いくよ。」

「ああ。」

一呼吸入れると、ドラゴンクローで心の雫を叩き潰した。

19話 ラティオス（後書き）

水晶って何で出来てるのかな。

ハンナ「さあ、よく分からない。ルーク知ってる？」

ルーク「知らん。」

ラーク「石英は、ケイ素一つと酸素二つで出来てるんだよ。いやー

面白いね。」

20話 兄弟の絆

「なに！」

ゼブリンが声を上げた。

その視線の先を見ると、外を動いていた鎌のようなエネルギー体が、崩れ去っていくのが見えた。

それと同時にゼブリンの拘束の手が緩む。

何んとか動かせる左手でドラゴンクローを放つ。

ドラゴンクローはゼブリンの首をかすめ細い傷を作った。

不意を打たれたゼブリンが、後ろに飛び避けた。

その間に震えている足腰を無理やり動かし立ち上がる。

しかし、ゼブリンのドラゴンダイブで壁に叩きつけられ、頭を壁に押さえつけられた。

「心の雫は・・・消えた。勝目は、お前に、無い。」

「ハッ！そんな物貴様の首でも見せてまた作らせればいい。邪魔をするなら、ここで死ね。」

ゼブリンの鋭い爪が首に迫った。瞬間、ゼブリンの体が視界から消える。

突然、支えを失ったルークは床に落ち咳き込んだ。

目をゆっくりと開ける。窓が割れ、硝子の破片が飛び散っている。

徐々に視線を動かしていくと緑色の尾と赤く縁取られた同じ緑色をした翼が見えた。

その下で、ゼブリンが這い出ようと動いていたが全く出られない。

「ゼブリン・ジャータ……。いや、逆賊ゼブリン。貴様を拘束する。」

凜とした声が響く。その声の主は一人しかいない。

「国王……。」

「国王！」

ルークの声を打ち消すように窓の外から声が聞こえた。

「ハクか。任せて良いか。」

「はい。」

割られた窓からカイリユーが飛び入ってきて、ラークの代わりにゼブリンを縛り上げる。

「ルーク。悪いね。良い所を持ってちゃって。」

ラークが落ちていた槍を拾いながらおどけて言う。

腕には無数の傷があった。

「国王……。济みませんが、ハンナの様子を……見てきて頂けませんか？」

「何で？」

ラークが不思議そうに言う。

「何でって。私は、動けないので……。」

ラークが目の前にしゃがんで目線を合わせる。

「私は彼女の保護者じゃないし、彼女に何もしていない。彼女の保護者はラークだろう。」

立ち上がって、穂先を折った槍を差し出す。

それを受け取って、壁伝いに何とか立ち上がる。

「酷い人だ。」

「それはお互い様。女の子を泣かせるのは一番酷いよ。」

ラークは苦笑いすると、ハンナの上って行った階段に足を進めた。

「行かなくて良いのですか？」

ハクがゼプリンを押えながら言う。

「行った方がいいかな？」

「良いと思います。」

「ハクの言う事は聞いておいた方が良さそうだ。」

ラークはラークと同じ階段に足をかけた。

ハンナはラティオスを必死にゆすっていた。

心の雫を壊したとき、大きなダメージが二人を襲った。ハンナはまだ大丈夫だったが、ラティオスの方は既に瀕死状態だった所にこのダメージだ。

「お兄ちゃんっ。一人にしないでって約束したじゃない。目を覚ましてよ。」

涙が止まらずに、ただ必死に呼び掛ける事しか出来ない悔しさがこみがってきた。

「ハンナ。」

突然の声に振り向くと壁伝いに血だらけのルークが来るのが見えた。

「ルーク！お兄ちゃんが、お兄ちゃんが……。」

ルークがラティオスの近くにしゃがみ、脈を調べる。

「大丈夫だ。泣くな。彼は助かる。もつと嬉しそうな顔をしろ。」

ルークがハンナの涙を拭きとる。頬に赤い筋ができた。

「だって……ルークが。」

「私なら大丈夫だ。この位……いつもの事だ……か……ら。」

ハンナの顔からルークの手が力無く離れた。

「ルーク！」

「おっと。」

崩れるルークの体を支える手があった。顔を上げる。

「怪我人を重ねるのは良くない。」

「ルーク……さん。」

「大丈夫ただの貧血だよ。これだけ血を流して意識がある方が逆に
凄いよ。」

ラークは自分と同じくらいの大きさのラークを担いだ。

「下に医師師が来ている。女の子に血を触らせる事はしないよ。ラ
ティオスは任せて良いかな？流石に二人はちょっと。」

「は、はい。」

ハンナはラティオスをサイコキネシスで浮かせて、ラークの後を
追って階段を下りた。

21話 カトラル建国祭

日差しが暑い。

ハクレイ湖の蒸気に邪魔されても、その太陽の明るさは変わらなかった。

城は半分崩れてしまったが、無傷な裏庭を使ってパーティーを開いていた。

「ハンナー。楽しんでるかー。」

「え、ええまあ。」

話しかけてきたファラルスは少し酔っているらしく顔が赤い。

「楽しそうじゃないぞ。こんな日に楽しまないのは損だ。ほら、あいつら見てみるよ。」

言われた方を見ると、ユシールという領主が、リトルナという女性領主に絡まれている。リトルナは完全に酔っているようだ。

上を見ると、ハクが塔の上で何か飲んでるのが見えた。

「ああ、あいつは恥かしがり屋だから良いんだよ。ほっといてやってくれ。それより呑むか？」

「え、あたしまだお酒飲めない……。」

「固い事言つなよ。カコアみたいに甘くならないと大変だぞ。」

「カコア？」

「ココアの事だろ。大体彼女はまだ酒を飲ませてはいけない年だ。」

「ケルト。生真面目さは変わって無いな。」

ケルトは、左目にまだ包帯を巻いているが、ファラルスを見る赤い目は呆れているのが分かる。

「やっぱり固いよ。お前は、」

「それはどうも。」

二人の間に火花が散る。

「えーあの〜。。。。」

「ファラルスさん。妹に手を出さないで下さい。」

「お兄ちゃん！もう良いの?」

ラティオスが人混みの中から出てきた。

「リアムか。別に手は出してないぞ。」

「いや、酒を飲ませようとしていた。」

「だったら僕が飲みます。」

「お兄ちゃん。飲む前に聞いていい?」

「何だい？」

「ルーク、何処に行つたか知らない？」

「さあ。」

「そう言えば国王も見ないな。」

「あたし探してくるね。」

ハンナは二人を探して、城の表側へ回った。

城は三日前の事件で半壊してしまつて。崩れた部分に布を被せてあつた。

眩しいので日陰に入つて上を見ながら二人を探す。

思えばこの何週間、もの凄い冒険をした訳だ。ヒラバンでルークに会わなかつたら、今頃どうなつていた事か。

「あー！リアムが倒れたー！」

突然の声に呆れるしかない。リアムは酒が飲めない。だからさっきのは冗談で言つたと思つたのに本当に飲んじゃうなんて。

「あーもうっ。せつかく良いムードだったのに！」

仕方なくハンナはもといた場所に戻つていった。

「外は騒がしいな。」

ルークは城の中のある部屋の窓辺にいた。相変わらず、綺麗に飾られていない部屋は兄の思い出でもあるからだ。

包帯を巻いた片腕を窓の枠にのせここから一望できるハクレイ湖を眺める。

波に反射した光がキラキラと光る。

「行かなくて良いのか？ああ、医術師から絶対安静と言われていたか。」

「それは二日間だけです。もう、出歩いても良いといわれましたから。それに、闇の監視者が行ったら楽しさが半減しますよ。」

「そんな事無いと思うけど。じゃあ、これでも飲むか？」

「私は酒は飲めませんよ。貴方と違って。」

振り向くと部屋の戸の影からルークが姿を現す。

片手に南方で作られたブリーの実の果実酒を持っている。

「何だ。せっかく持ってきたのに。それに一言多い。」

文句を言いながらも口では笑っている。
近くにあった机に果実酒の瓶を置いて、栓を開けた。ブリーの実の独特な匂いが部屋に広がる。
それをグラスに入れてラークも窓辺にやってきた。

「ここから見る湖はこんなでしたっけ。」

「そうだな。変わって無いな。」

「そうですか。」

見る景色が変わって見えるのは、過ぎ去っていった時間の長さだ。此処に来るのにあまりに長い時間がかかった。

「全く、今回の事件で領主が二人も欠落してしまった。」

「それを私に言ってどうするんです。」

「こつする。」

そう言つとラークは首に巻かれた橙の布を解き手渡した。

「……もう酔ったんですか？」

「これだけで酔うわけ無いだろう。」

グラスを置いて布を握らせる。

「領主になって私と一緒にこの国を立ち直らせたのなら、それを首

に巻く。この国を出て旅を続けたいなら、それを私に返す。自分で決めれば良い。」

「……そんな事言っても私と貴方が血の繋がりを持っているなんて分かりませんよ。昔から似て無いと言われていましたし。大体、籍が無いんですから。」

「それなら心配は要らない。何とか出来る。」

領主になって兄を助ける。それは子供の時から夢だった筈だ。でも、十八年前からそんな事すっかり忘れてしまっていた。

たぶん二度とないチャンスだろうが、もう答えは決まっている。

「断りますよ。」

ルークは布を突き返す。

「突然出てきた知らない奴に、今日からお前たちの領主だ。なんて言われたくは無いですよね。」

「それもそうだな。でも何時でも戻ってきてても良いからな。カトラル王国は罪人以外は誰でも大歓迎だから。」

「それはどうも。」

「相変わらず冷たいな。やっぱりどんなに時間がたっても、その冷たさと目だけは変わらないな。」

思い出した。この目を最初に氷みたいだと言ったのは、彼だった。しかもこの場所で。

「変わらないのはお互い様でしょう。兄さん。」

最後は照れ臭くて小さくなってしまった。

「えっ。何て？」

「何でもありません。」

「でも今『兄さん』って言ったような気が……。」

「言ってますん。」

「あー。こんな所に居たー。」

「ハンナ！」

「ありゃ。見つかったちゃた。」

窓からハンナが顔を覗かせた。

「ラークさん。皆が探してましたよ。ルーク。なんで来ないのよ。」

ハンナが腕を引っ張る。

「分かったから引っ張るな。傷が開く。」

「仕方ない。どうせまたユシールとリトルナの事だろ。」

溜息をつくとき、ラークは窓から飛び出した。

「早く早く。」

「急かすな。これを緩めないと飛べない。」

そう言っつて、翼の付け根に巻かれた包帯をずらす。

傷口はまだ完全に塞がっていない。後で包帯を変えないと。

そう思いながらルークもハンナと一緒に、飛び出した。

夏の日差しが気分を明るくさせた。

21話 カトラル建国祭（後書き）

ルーク「次回、最終話。ハンナの恋は叶うのか。何だこの次回予告は。」

ライク「私が用意した。簡潔で読みやすいだろ。」

リアム「何だって！妹が何時の間にそんな事に！」

やっぱり来た・・・。

最終話 砂漠の守護者（前書き）

ついについに最終話。長かった。
ルーク「何言ってるんだか。」

最終話 砂漠の守護者

ルークとカトラルルの最高権力者六名はカトリシアの西側の門に居た。

「此処まで来られなくても良かったんですけど……。」

「良いだろ、どうせ暇だったんだし。」

「ファラルス。場を考える。城の中では無いんだぞ。」

ファラルスは、明らかに面白そうだからという理由だろう。ケルトはファラルスが心配だからだ。本当に仲が良い。

「戦友を見送らないなんて、酷いですからね。」

ユシールが言う。大抵どんな所にも付いて来るから喋り方が何となくラークに似ている。

「国王命令だから。」

ハクはあまり喋らない。

「で、その国王サマは何処へ行っちゃた訳？」

「さっきから此処に居るぞ。リトルナ。」

リトルナのすぐ横にさっきまでいなかった国王、ラークが居た。

「ゲツ。何時から居たんですか。」

「ファラルスが話し始めた少し後からだ。そういう事を何時も考えていたのか。」

「ごめんなさいっ!」

リトルナが空かさず謝る。

「ルークさん。すみません。ハンナの奴何処かへ行っちゃって。」

「相変わらずか……。」

これには苦笑いするしかない。二人はカトリシアで暮らす事になっている。家には大した物は無いから良いらしい。

「ラークさんが働き口を作ってくれたので、しばらくは大丈夫だと思います。」

「丁度、エスパタイプで飛べる子が欲しかったからね。」

ラークがおどけて言う。ん、丁度今欲しくて、飛べて、それでいてエスパタイプ、それはつまり。

「リアムに城を直させるつもりですか？」

「正解。他の人にも手伝って貰うけど……。」

「聞いて無いですよ。」

「でも働き口が欲しかったんでしょ。」

「ううう。」

流石は話術の天才。人をその気にさせるのが上手い。ハンナだったら簡単に彼の口車に乗せられるだろうな。

「ルーク。今、変なこと考えていただろう。」

おまけに他人の心の中に目があるようだ。

「来ないなら仕方ない。何時までも待つてる訳にはいかない。」

「やっぱり冷たいな。」

ルークが門の方を向くと、ラークが冷やかす様に言った。

「ハンナちゃん、ルークのこと好きそうだったのに。」

「だからって待つ理由にはなりません。」

「可哀想に……！」

何かに反応して、ユシールとケルトが左右に避けて一人分ほどの隙間を作る。そこに何か赤い物が凄い勢いで飛び込んできた。

「誰か止めて。」

「ハンナか……。」

ルークは左足を引いて半身をずらす。そのままハンナは地面にぶつかった。

「痛い！何で受け止めてくれなかったのよ！」

「受け止める必要は無いと判断したからだ。それ以外無いだろう。」

「酷ーい。女の子の顔に傷が出来ても良いって事。」

「自業自得だ。」

その言葉にむすつとしていたが、ルークの荷物を見て寂しそうな顔になった。

「本当に行っちゃうの？」

「ああ。」

「此処に居ないの？」

「ああ。」

「じゃあ。」

突然、ハンナの唇が触れた。

「！」

「あっ！」

「おっ！」

「……。」

「フフーン。」

「……。うわっ！」

ユシールの驚きの声に視線の方を見ると、リアムが肩を落として放心状態になっていた。口も半開きだ。

「これはどうすれば……。」

「ユシール、リトルナ。リアムを励ましておいて。」

「は、はい。」

そんな事があったのも気付かずに、ハンナがやっと放してくれた。

「っ。」

顔が赤くなってるのが何となく分かった。

「へへー。あたしの勝ち。」

それを見ていたラクが笑いをこらえられ無くて笑いだした。

「良いね。砂漠の守護者と口付か。」

「砂漠の守護者って？」

「フフ、この国の守り人の事。」

「それを私と重ねたということか、面白くないですよ。」

「それはどうも。」

ラークが笑いながら手を振る。後ろでは、リアムに言い訳をする為にハンナが無理やり立たせている。

「そのうち気が向いたら戻って来ますよ。生きてたんですけど。」

ラークは笑い返して、砂漠に向かって飛び立った。

最終話 砂漠の守護者（後書き）

ハンナの恋は叶ったのかって？それはどうでしょうかね？
心の中で考えてみてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6188j/>

砂漠の守護者

2011年8月10日00時35分発行